継続的な改善活動のために!

2005

在学生·卒業生·企業人事担当者·教職員

KIT総合アンケート調査結果 「報告書(抜粋)]

学校法人 金沢工業大学

KIT総合アンケート調査結果について

学長石川憲一

周知のように、'70年代を境目として我が国における大学を始めとする高等教育は大きく変化し、最近に至ると修学年齢世代の約50%が大学・短大へと進学する所謂「大学教育のユニバーサル化現象」が生じてきております。このような状況は一面においては、資源小国である我が国にとって人材と言う『財』を然るべく育成し、国民の知的水準を向上することは望ましいことではありますが、一方では卒業生の質的保証や当該大学に対する満足度等に関しては、従来から不明な点が多いのが現状であります。

金沢工業大学は、開学以来40年の歴史を着実に刻み、昨年度より工科系単科大学から、工学・環境・情報系より成る3学部15学科体制を有する工科系総合大学に移行いたしました。このような展開の中にあって、'95年度以来実践して参りました教育改革の成果の内、外部評価の一環として'02年度には機械系並びに材料系、'03年度には環境系並びに建築系の教育プログラムに対して『日本技術者教育認定機構:JABEE』の認定を受け、加えて'04年度に大学基準協会が実施した認証評価にて「基準に適合」との認定を受けることが出来ました。これからは、全ての教育プログラムのJABEE認定を目指すと共に、日本経営品質賞等の視点やメジャーの異なる外部評価を受ける予定であります。そして、'03年度に文部科学省が実施いたしました『特色ある大学教育支援プログラム: GP』に「工学設計教育とその課外活動環境」が採択されたことを受けて、更に本学教育改革を推進させるために、'96年並びに'02~'04年に引き続いて在学生・卒業生・企業人事担当者・教職員の各位に対して9種類のアンケートを依頼致しました。

通常、この種のアンケートは自己点検・自己評価の下に行われる訳ですが、本学では第三者である(有)アイ・ポイントにアンケートの設計から調査結果の評価並びに分析に至るまで全てを依頼いたしましたので、より客観性のある報告書になり得たものと考えております。

本アンケートはこれからも継続して実施すると共に、今回得られた結果を踏まえて本学の工学教育・技術者教育へフィードバックしながら、 卒業生・修了生の質的保証や在学生の更なる満足度の向上に資することに致したく思っておりますので、忌憚のないご意見をお寄せいた だければ幸いであります。

最後になりましたが、本アンケートにご協力いただきました関係各位に対しまして、衷心より感謝申し上げる次第であります。

※ 本報告書(抜粋)のページ番号は、報告書(全文)の目次に 対応しているため、ページ番号が連続していません。

報告書(全文)目次

<1>	本調査の全体像	1
<2>	調査結果の全体サマリー	9
<3>	全体的評価に関して	23
<4>	授業・学習支援に関して	53
<5>	学生生活・雰囲気に関して	91
<6>	就職・進学支援に関して	103
<7>	サービスや機能(利用価値)に関して	119
<8>	「人材の能力」に関して	133
<9>	新入生アンケートより	161
<10>	教職員アンケートより	179
<11>	企業アンケートより	195
<12>	回答者プロフィール	207
<13>	フリーアンサー集	221
<14>	調査票見本	393

■調査目的

- 本調査は金沢工業大学(以下、KIT)を取り囲む関係者の中から「在学生(新入生~卒業・修了直前)」「卒業・修了生」「教員」「職員」を対象として、KITに対する評価、満足度を聞き、過去の回答と比較しながら現状を把握することを主目的としている。
- そして、上記の各層が「KITをどのように見ているか?」「各々の見方にはどのような違いがあるのか?」「以前とどのように変わっているのか?」といった基礎的な情報を把握し、今後の学校運営、広報の検討に活用できるようにとりまとめている。
- 設問に関しては、できるだけ属性間の差を少なくして、比較分析が行いやすいように調査設計の見直しを行った。
- また、今回は3年ごとに実施している「企業の人事担当者」に対する調査も実施しており、3年前と比較して「企業の採用状況がどのように変化したか?」といった点にも注目している。
- 本報告書の結果は、単に「学生の満足度を高めるため」だけに役立てるわけではなく、「在学生、卒業・修了生、教職員、企業担当者といったKITを取り囲む全ての関係者(ステークホルダー)の満足度を高めるため」に役立て、「KITをより良くするための継続的改善」を進めていくことを最終的な目的としている。

■調査方法

調査時期 平成17年2月~4月 平成16年度のカリキュラムが終了した時点に、その年度の状況評価を聞いた。(報告書内では05年と表記している)

調査方法 下記のように属性に応じて回収ボックスによる回収と郵送による回収によって実施した。

なお、全て『無記名式』とした。

回収数 属性別の回収数は下記の通りである。今回の調査より、在学生への調査期間をこれまでの年度当初(4月)から年度末(2月)に変更した。

今回の全回収数は6.440サンプル

調査主体 学校法人 金沢工業大学

集計分析 (有)アイ・ポイント

■調査対象

対象者	概略	05年	04年	03年	調査実施方法	備考
	(2005年3月時点)	回収数	回収数	回収数		M. 5
新入生	入学直後	1,610	1,672	724	オリエンテーションで配布し、回収ボックスで回収	05年より新学科体制で集計
1年次生	1年次終了時点	1,379	1,007	106	オリエンテーションで配布し、回収ボックスで回収	05年より新学科体制で集計。旧Fクラス
Jクラス	Jクラス終了時点	1,533	792	49	オリエンテーションで配布し、回収ボックスで回収	
Cクラス	Cクラス終了時点	441	449	106	オリエンテーションで配布し、回収ボックスで回収	
卒業·修了直前	卒業·修了直前	610	914	976	研究室単位で配布し、回収ボックスで回収	グラフでは「卒・修直前」と略
卒業·修了生	平成15年度卒業・修了生	97	107	163	郵送にて配布し、返信用封筒で郵送にて回収	入社し1年経た卒業生。グラフでは「卒・修生」と略
教員	在職中の教員	151	133	143	個別に配布して、回収ボックスで回収	
職員	在職中の職員	134	131	187	個別に配布して、回収ボックスで回収	
企業担当者	KIT卒業生が就職した企業	485	実施せず	実施せず	02~04年3月に卒業・修了生が入社した企業に郵	02年に過去3年間に入社した企業を対象に実施し、
					送にて配布し、返信用封筒で郵送にて回収	529社から得た回答と比較した
合計		6,440	5,205	2,454		

■調査内容と設問の見直し

各属性別に実施した主な調査項目は下記の通り。質問項目の詳細は巻末の「調査票見本」を参照。

調査名	昨年までの呼称	実施年	施設・機能・ サ ー ビス	授業	学習環境や学 習支援	学生生活	就職支援	KIT満足度	社会が求める 人材像	現在の自分の 能力
÷r 2 4	4 F > 5 + / F = 3 >	03年	_	_	_	概略	_	詳細	_	_
新入生	1年次生(Fクラス)	04年				, 概略		詳細		
(4月初旬に実施)	(4月初旬に実施)	05年				詳細(一部)	_	詳細		
4 7 4		03年	詳細	詳細	詳細	詳細	_	詳細		詳細
1年生 (2月に実施)	Jクラス (4月に実施)	04年	詳細	詳細	詳細	詳細		 詳細		詳細
(2月1~美肥)	(4月15天旭)	05年	詳細	詳細	詳細	詳細	_	詳細		詳細
14	04-7	03年	詳細	詳細	詳細	詳細	_	詳細	詳細	詳細
Jクラス (2月に実施)	Cクラス (4月に実施)	04年	詳細	詳細	詳細	詳細		 詳細		詳細
(2月1~美肥)	(4月1年美元)	05年	詳細	詳細	詳細	詳細	_	 詳細		詳細
0.5=7	0.5=7	03年	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細
Cクラス (2月に実施)	Sクラス (4月に実施)	04年	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	[詳細
(2月に美肥)		05年	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細		詳細
│ ○ 卒業・修了直前	卒業・修了直前 (2~3月に実施)	03年	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細
(2~3月に実施)		04年	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細
(2.3月15天旭)		05年	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細
┃ 卒業・修了生	卒業・修了生 (3月に実施)	03年	概略	概略	概略	概略	概略	詳細	詳細	詳細
(2~3月に実施)		04年	概略	概略	概略	概略	概略	詳細	詳細	詳細
(2193万亿天池)	(3万15天池)	05年	_	_	_	詳細	詳細	詳細	詳細	詳細
人 教員	教員 (3月に実施)	03年	概略	概略	概略	概略	概略	詳細	詳細	詳細
対員 (2~3月に実施)		04年	概略	概略	概略	概略	概略	詳細	詳細	詳細
(2 3万亿天)旭/		05年	_	_	詳細	詳細	詳細(一部)	詳細	詳細	詳細
職員 (2~3月に実施)	 職員	03年				概略		詳細		
	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	04年				概略		詳細		
(2 0万10天池)	(0万10天)地)	05年	_	_	_	詳細(一部)	_	詳細	_	_
企業	02年•企業									
(2~3月に実施)	(2~3月に実施)	L								
(2:50万15天池)		05年	_	_	_	_	_	_	詳細	詳細

※設問の見直しに関して

前回までは新入生や教職員、卒業生には在校生と異なる設問(簡易な内容)で聞いていたが、直接的に比較するために設問は同じ内容とした。また、上記と関連して、卒業生や教職員に聞いても改善に結びつけるのが難しいと思われる項目は削除した。

※「社会が求める人材像」に関して

「社会が求める人材像」と「学生の自己評価」は全く同じ内容で聞いた。また、教員には「学生の自己評価」を「KITの卒業生評価」と置き換えて聞いた。 03年まではJ、C、Sクラスにも「社会が求める人材像」を聞いていたが、回答の負担を軽減するために04年からは聞いていない。

■PDCAサイクルの中での本報告書の位置づけ

本報告書は前出の目的に基づいて作成されているが、具体的なPDCAサイクルの中では下記のように位置づけられる。

今回は3学部15学科体制になり、 カリキュラムも変更されているので、 そのチェックも行える。

PDCAサイクル

PLAN

- □ 目的と目標の設定
- □ 業務プロセスの作成
- →目的を明確化し、改善を織り込んだ 業務プロセスを作成し、具体的な 目標(数値、その他)を設定する



DO

- □ PLANによって定められた業務プロセスの 実行
- →各自が常に業務プロセスの本来の 目的を意識し、目標達成するため に確実に業務プロセスを実行する



ACTION

- □ 業務、サービスの継続的改善のための業 務プロセスの見直し、改善策の検討
- →本調査の自由記述の読み込み、職場内での反省会実施によって、課題を共有し、改善策を検討する

KITをより良くするための 継続的改善



CHECK

- □ 業務、サービスの達成度測定
- □ 利用者の満足度の測定
- →毎年の調査結果より現在の学生の 満足度、昨年からの評価の変化を 数値的に把握する
- 今回の調査によって得られた「KIT関係者のKITに対する評価、満足度」は、上記「PDCAサイクル」の中の「CHECKステップ」に相当する。
- ●「PDCAサイクル」は一時的なものではなく、継続的な改善を目指すものである。従って「他の施設や機能と比較して評価がどうであったか?」という相対的な結果を見るよりも、「昨年と比較して評価がどう変化したのか?」「自らが設定した目標は達成したのか?」といった変化を見る方が、よりPDCAのサイクルに則した見方ができると思われる。
- また、今後の改善策を検討するためには、巻末の「自由記述」が有効であり、多くのヒントが含まれているものと思われる。
- 本調査企画は昨年から改善を重ねて内容を見直しているため、質問方法、選択肢などが異なる部分もあるが、今後はこれらの 違いをできるだけ少なくし、より比較検討が行いやすい内容にしていく予定である。

■集計・分析上の注意点に関して

今回の調査結果は基本的に下記の方針で集計、分析を行っている。ただし、これらの内容と異なる際には各ページに注意書きをつけている。

分野	注意点	備考
平均値に 関して	• 平均値は学生の特徴を見るために「学生平均」を算出している。これは学生全員の回答から算出している。	
加重平均に 関して	 各調査項目を属性毎に比較するために、加重平均値を多く活用している。 今回の調査では、選択肢を「満足~まあ満足~やや不満~不満」「そう思う~ややそう思う~あまりそう思わない~そう思わない」など4択式で構成した。 加重平均は上記の選択肢に、+10点、+5点、-5点、-10点を掛けて回答者数で除して算出した。従って、最高点が10点で最低点がマイナス10点となる。 無回答は回答者数に含めていない。また、02年は一部に「わからない」という選択肢があったが、加重は「0」として全体数に含めている。 	
グラフに 関して	 折れ線グラフは主に時系列変化を見る際に利用されるが、この報告書では加重平均を属性毎に比較する際に、本来の棒グラフでは見にくくなるために折れ線グラフで表現している。 横帯グラフ中の数字には単位が記載されていないが、全て「%」となる。 加重平均の折れ線グラフと加重平均による前年との比較棒グラフは、全て数値軸の設定を一致させている。 	
実施年による違い	 昨年度まで選択肢の違いがあったが、今回は03年から05年まで全て統一されており、全て同じ基準で比較を行っている。 収集すべき情報の吟味、回答者の負担軽減などによって、04年までに実施した設問を05年で廃止するなど、調査項目自体の見直しも行っている。 また、設問分野も簡素化しているため、昨年度の報告書とは異なる分野に設問が含まれている場合がある。 	• 今後も調査項目の見直しは 行う予定。
学系・学科に関して	・ 今回の対象者の「新入生」と「1年次生」は新しい学科体制であるため、それまでの学科体制とは比較ができない。	
検定に関して	• 各クロス集計に関しては、本来であれば何らかの検定によって統計的な有意性を確認すべきだと思われるが、この報告書では検定は行っていない。	

■詳細データに関して

各分野の後半に掲載されている詳細データは、03年から05年までの総合調査の全データであり、加重平均の算出などに使われた最も基礎的なデータである。 加重平均で見えてこない点や属性別の詳細な比較といったデータの分析は、下記の具体的な活用事例を参考にして各自で分析、活用ができるようになっている。

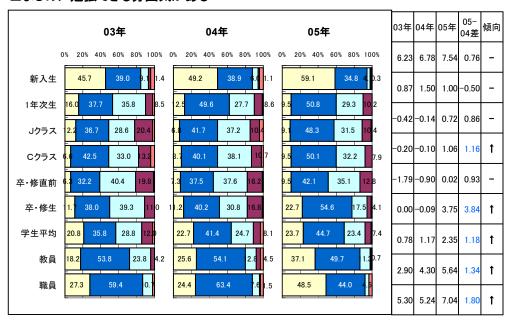
■詳細データの具体的な活用事例

具体的には下記のような活用事例が考えられる。 なお、グラフと集計表の数値の内容に関しては各分野の冒頭で説明をしている。

例1:まじめに勉強できる雰囲気がある

- 回答者は全て統一されており、新入生、1年次生、Jクラス、Cクラス、 卒業・修了直前、卒業・修了生、教員、職員の8属性となる。
- 学生平均は学生全体の回答を平均したものであり、学生の全体的 な意見と見ることができる。
- 横帯グラフを見ると、05年の1年次生では「まじめに勉強できる雰囲気がある」で「そう思う」が9.5%であることが分かる。逆に、「そう思わない」が10.2%である。
- 右表は加重平均であり、「そう思う」に+10点、「ややそう思う」に+5 点、「あまりそう思わない」に-5点、「そう思わない」に-10点の荷重 をかけて回答数で除した数値となっている。
- 数値が大きい方が満足度が高いということになり、マイナスの場合 は肯定よりも否定の方が多かったことになる。
- 表内の「05-04差」は、05年の加重平均値から04年の加重平均値を マイナスしたものであり、プラスの場合は05年の方が評価が高かっ たということになる。
- ●「傾向」の矢印は「差」を視覚的に表したものであり、05年の数値から04年の数値をマイナスしたものが、1より大きい場合は「↑」として昨年より評価が上がったことを示している。また、-1より小さい場合は「↓」として評価が下がったことを示している。

■まじめに勉強できる雰囲気がある



□そう思う □ややそう思う □あまりそう思わない ■そう思わない ■不明

今回の調査を通して、下記のような課題とそれに対する仮説を考えることができる。

■学年や分野を問わず、全体的に満足度低下が見られる。					
1.アンケート実施時期の変更による影響	 ● 1年生~Cクラスに対するアンケートは、昨年までは学年が変わった4月に前年に対するアンケートを行っていたが、今回は最終試験前の2月にその年のアンケートを実施している。 ● 新たな気持ちでスタートを切ろうとしている時期と、最後の課題や試験に追われている時期という差があり、その気持ちの差がアンケート結果に出た可能性はあると思われる。 ● 次回のアンケートを同一時期に実施して、今回との差を確認することで実施時期の影響は明らかになると思われる。 				
2.学科再編による「1年次生」への影響	1年次生の満足度の低さが全体平均を引き下げていたという面もあり、今回の1年次生は昨年の1年次生と大きく意識が違っていると思われる。その差の要因として学科再編などの影響が考えられるが、1年次生に関する事柄は別項目として検討する。				
3.大学に対する共感性の低下	●「KITに満足している」「KITが好き」「後輩に勧めたい」などの項目は3年間継続的に同意意見が減少しており、満足度以外に学生の大学に対する共感性が低下しているのではないかと思われる。 ● 今年度で共感性が低かったのは「1年次生」「AO入学者」などであった。KITのファンとして入学してきた「AO入学者」の満足度が低く、特に共感性が低いと言うことは、入学してみて、期待どおりではなかったり、うまくいかないと感じている可能性もある。これは「1年次生」にも考えられるものである。				

■その他の課題

1.授業、授業以外を含めて、何かに打ち込める環境と機会を作ることが重要

- 勉強に積極的に取り組めており、勉強以外に打ち込めるものを見いだせているという回答は5割であり、これらの学生の満足度は全体的に高かった。
- 昨年の分析では「プロジェクトや研究など、勉強以外に打ち込めるものを見いだせている学生の満足度も高いのではないか」という仮説を構築したが、今回の確認では「勉強以外に打ち込んでいる学生の満足度も低いわけではないが、やはり授業の満足度が大学全体の満足度につながる」ということが分かった。
- 授業、授業以外を含めて、何かに打ち込めている学生を増やすことが重要だと思われる。

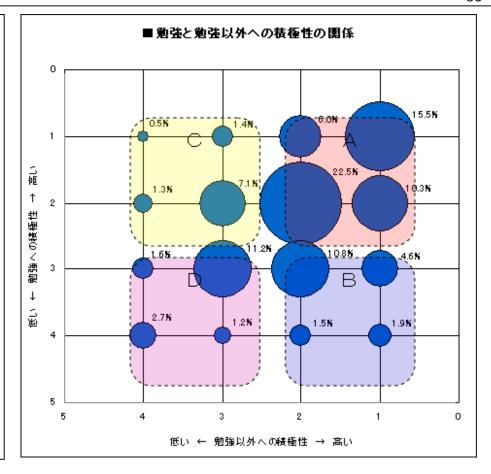
2.授業と学習支援の充実が最優先

- 授業に満足している学生が全体的な満足度が高いため、授業の満足度向上を最優先に置いて改善活動を進めるべきだと言える。
- また、授業と関係性が深く、授業の次に満足度が低かった学習支援の満足度向上も優先順位を 高く置いて対応すべきだと言える。

3.校風があわないという意見の詳細を知る必要がある

- 校風があわないという意見が増加しているが、それがどのようなことを指すのかを確認しておくべきだと思われる。
- 前項の「共感性」の低下と同じことを指しているのであれば大きな問題であり、これらの事柄が指 す内容を把握することも重要だと言える。

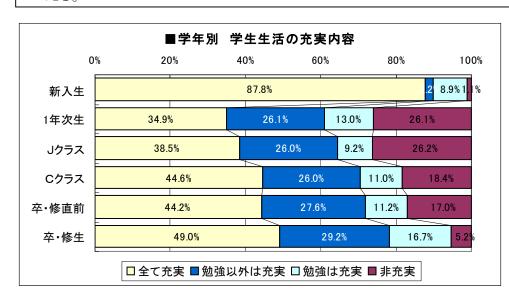
- これまでの調査で「プロジェクトやサークルなど、勉強以外に打ち込めているものがある学生は学生生活が充実していると感じているのではないか」という仮説があったため、その検証を行った。今回、「勉強に積極的に取り組めているか」という設問と「勉強以外で積極的に取り組めているもの・ことがあるか」という2つの設問を新設し、その2つの関係で下表のように4つの属性を設定した。
- 右図の数値・円の大きさは体を100%としたときの人数割合を表している。
- まず、全体を見るとAの「全て充実」が最も多く、54.3%を占めていた。その中でも勉強にも勉強以外にもやや積極的という層が22.5%と多く、このように考えている学生が大学の中で最も多いと言える。
- 次にBは勉強以外に打ち込めているものがあるが、勉強には積極的になれていない層であり、この層には積極性があるため、少しの工夫でAの領域に移行させることができるのではないかと思われる。この層が18.8% おり、この層への対応に優先順位を高くおくべきだと思われる。
- Cは勉強には積極的になれているが、勉強以外に打ち込めるものが見えていない層であり、最も少ない10.3%であった。この層は興味が勉強に集中しているのか、打ち込めるものが見つからないのか、やらされ感で勉強に取り組んでいるのかなど、不明な点もあるため、更なる情報収集を行った上で技術者としての広がりを持たせるような対応が必要だと思われる。
- Dは勉強も、それ以外にも打ち込めていない層であるが、まず勉強も含めて打ち込めるものを探すところからのスタートとなる。

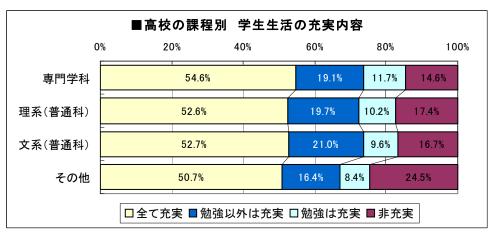


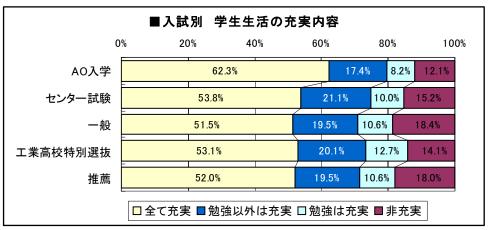
	勉強に積極的に 取り組めた	勉強以外で打ち込めて いるものがある	想像される属性	名称	割合
Α	YES	YES	• 勉強、勉強以外の両方に積極的に取り組めており、非常に充実した学生生活を送ることができている。	全て充実	54.3%
В	NO		・勉強には積極的に取り組めていない。・勉強以外で打ち込めているものがある。プロジェクト、サークル活動、研究活動などの他に、趣味で打ち込んでいるものも含まれる可能性はあり、内容までは不明。	勉強以外は充実	18.8%
С	YES		・勉強には積極的に取り組めている。・勉強以外で打ち込めているものがないのは、打ち込もうとしていないのか、見つからないのかは不明。	勉強は充実	10.3%
D	NO	NO	• 何も打ち込めるものが見えていない。	非充実	16.6%

- 2つの設問は学年によって微妙に 聞き方が異なっている。
- 「1年次生」から「卒業・修了直前」 までには「自分自身が現在どうであるか」という聞き方をしている。
- 「卒業・修了生」には「学生時代の 自分はどうであったか」と聞いて いる。
- 「新入生」には「入学したらどうありたいか」という希望で聞いているため、前向きな意見が多くなっていることが考えられる。

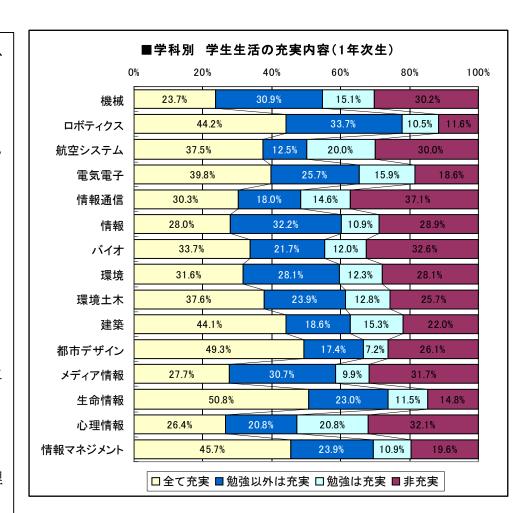
- 前項の学生生活の充実内容が属性によってどのように違うのかを確認した。
- まず学年別では、「新入生」は約9割が全て充実であったが、これは「大学に入ってどうありたいか?」という希望で聞いたためこのような結果になった。
- 他の学年では、明らかに高学年ほど「全て充実」という回答が増加していた。そして、「勉強以外は充実」と「勉強は充実」の割合はほとんど変化せず、「非充実」が減る傾向が見られた。これは他の満足度でも同じであり、今年度の学生は高学年ほど充実しているということが確認できた。
- 高校の課程別でも確認したが明確な違いは見られず、高校の課程と学生生活の満足度には関係はなさそうであった。
- 入試別で見ると「AO入学」で少し「全て充実」が多かったが、これは「新入生」が含まれるためだと思われる。おそらく「新入生」を外すと「1年次生」と「Jクラス」だけになるため、「全て充実」は減るものと思われる。他の入試を見ると、入試の種類と学生生活の充実との関係はあまりないと言える。



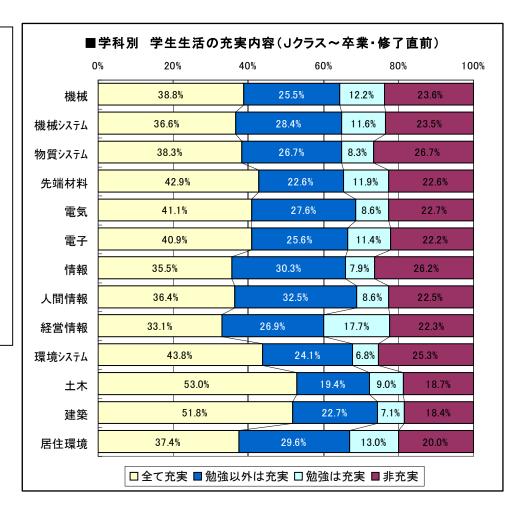




- 今年度は「1年次生」のマイナスが大きな影響を持っているようなので、「1年次生」だけ抽出し、「その他の在校生」は1つのグループとして分析した。
- ●「1年次生」で学科別の学生生活の充実内容を比較したところ、前項 の他の学年と比較すると非常に大きな特徴が見られた。
- まず、「全て充実」が最も多かったのは「生命情報」で、5割を越えていた。次いで「都市デザイン」「情報マネジメント」「ロボティクス」「建築」の順で、「全て充実」が4割を超えており、学生生活が充実しているようであった。
- 「授業」の満足度では、高いものから「ロボティクス」「電気電子」「航空システム」「建築」「生命情報」という順で、「全て充実」とよく一致していた。
- 逆に「非充実」が多かったのは「情報通信」「バイオ」「心理情報」「メディア情報」といったものであり、「授業」の満足度が低かった「メディア情報」「バイオ」「情報通信」「情報」とよく一致していた。
- ただし、「都市デザイン」は学生生活で「全て充実」が多いにも関わらず「授業」の満足度が非常に低く、どのような状況であるのか解釈しにくい結果であった。
- 次に「勉強以外は充実」を見ると、「ロボティクス」「情報」「機械」「メディア情報」が多めであったが、「ロボティクス」や「機械」などは夢考房プロジェクトに参加しているといった要因が考えられる。
- 「勉強は充実」は学科によってそれほど大きな差はなかったが、「心理情報」と「航空システム」は多めであり、この学科では勉強を最優先で取り組んでいる学生が多いようであった。
- 今回の調査では「1年次生」の満足度が低く、今後の改善活動の上での大きなテーマとなりそうであるが、この数字を見るだけでも学科毎に大きく状況が変わることが分かるように、学科毎の状況を詳細に把握し、個別に対策を行っていくことが必要だと言える。



- 「Jクラス」~「卒業・修了直前」までを学科別に集計した。 個別のデータに関しては次項以降に提示している。
- 「全て充実」を見ると「土木」と「建築」が同じ程度であり、学生生活が 充実していることが分かる。次いで「環境システム」「先端材料」という 順であった。
- 後段で授業の満足度を学科別に比較しているが、満足度が高かったのは「建築」「先端材料」「土木」の順であり、「全て充実」の割合はその結果とよく一致しており、学生生活の充実と授業の充実は関係が深いことが確認できた。
- その他の学科を見ると、「人間情報」と「情報」で「勉強以外は充実」という割合が多めであり、「経営情報」で「勉強は充実」の割合が多めであった。
- しかし、「建築」「土木」「環境システム」などを除くと、それほど学科による違いは大きくなく、どの学科を見ても「非充実」が2割強はおり、これらの学生の実態を把握しておく必要もあると思われる。



勉強に積極的に取り組めており、 勉強以外にも打ち込めるものを見つけているという 「全ての面で充実した学生」は全体の54.3%であった。

- □ 上記に次いで「勉強以外で打ち込めているものがあるが勉強には積極的になれていない」という層が18.8%であった。この層は積極性があるため、少しの工夫で勉強にも積極的になれるのではないかと思われる。
- そして、「勉強には打ち込めているが勉強以外には打ち込めていない」という 層が10.3%で、勉強面では問題はないが技術者としての広がりを持たせるような工夫も必要だと思われる。
- □ 勉強にも勉強以外にも打ち込めていない学生(非充実)は16.6%いた。

「全て充実」は1年次生が最も少なく、 学年が上がるほど「全て充実」が増加している。

- □ 高学年ほど「全て充実」という回答が増加し、「勉強以外は充実」と「勉強は充実」の割合はほとんど変化せず、「非充実」が減る傾向が見られた。
- □「1年次生」では「全て充実」は34.9%であったが、「卒業・修了直前」では 44.2%にまで増加しており、意識が大幅に変わっていることが分かる。

学科間で学生生活の充実内容が異なっており、 授業満足度が高い学科ほど全て充実の割合が多いという 傾向が見られた。

- □ 1年次生の学科別には「生命情報」「都市デザイン」「情報マネジメント」「ロボ ティクス」「建築」などで「全て充実」の割合が高かったが、これらの学科は「授 業」の満足度も高かった。
- 他の学年では全体で見ると「土木」「建築」で「全て充実」の割合が多かったが、 学科別に見ると学年による傾向は様々であった。
- □ 昨年も別の指標で確認したが、学生生活の充実は授業の満足度と関係が深く、授業で満足感を感じさせることが大学の総合的な満足度を上げることになると言える。

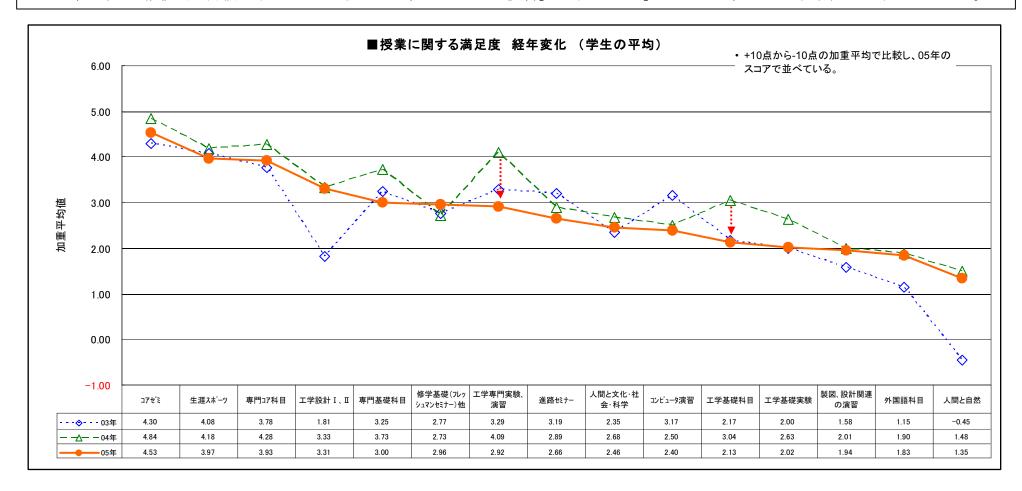
勉強以外が充実しているという学生よりも、 勉強が充実しているという学生の方が 大学の満足度は高い。

- □ 大学に対する満足度を学生生活の充実内容別で見ると、「全て充実」の満足度が最も高いが、それに次ぐのは「勉強は充実」という層であり、「勉強以外は充実」の満足度を上回っていた。
- □「勉強よりもクラブやプロジェクトなど課外活動に夢中になっている学生の満足度の方が高いのではないか」という仮説があったが、学生生活は充実していると考えているものの、総合的な満足度は勉強に積極的に取り組めているという学生には及ばなかった。

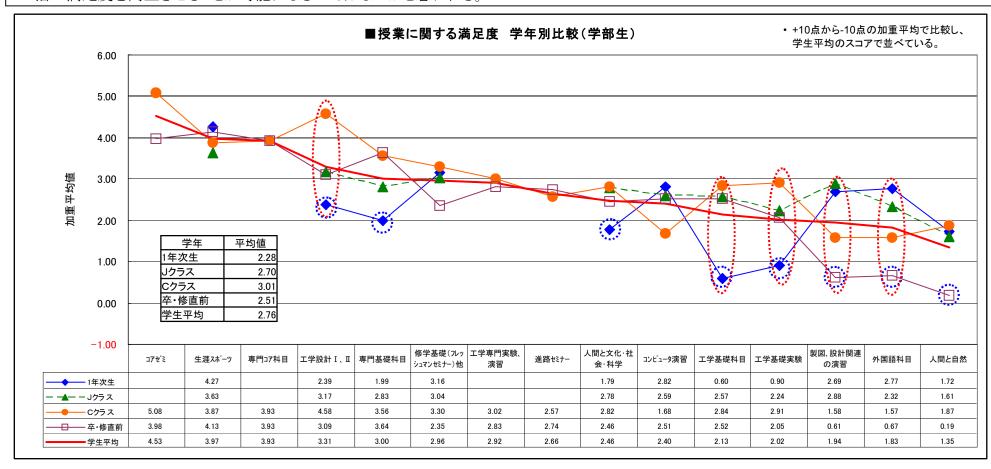
学生の半数は勉強に積極的で勉強以外にも打ち込めているものがあるという回答であり、それらの学生は授業や大学に対する 満足度も高かったため、何かに打ち込める環境をつくることが満足度向上につながると言える。

そして、「非充実」層は1年次生では3割前後、その他在学生で2割強おり、これらの学生の詳細把握も重要と言える。 また、勉強以外に打ち込める環境も重要であるが、勉強に積極的になれている学生の方が総合的な満足度が高いことから、 授業の満足度向上が重要であり、低学年ほど授業改善が求められている。

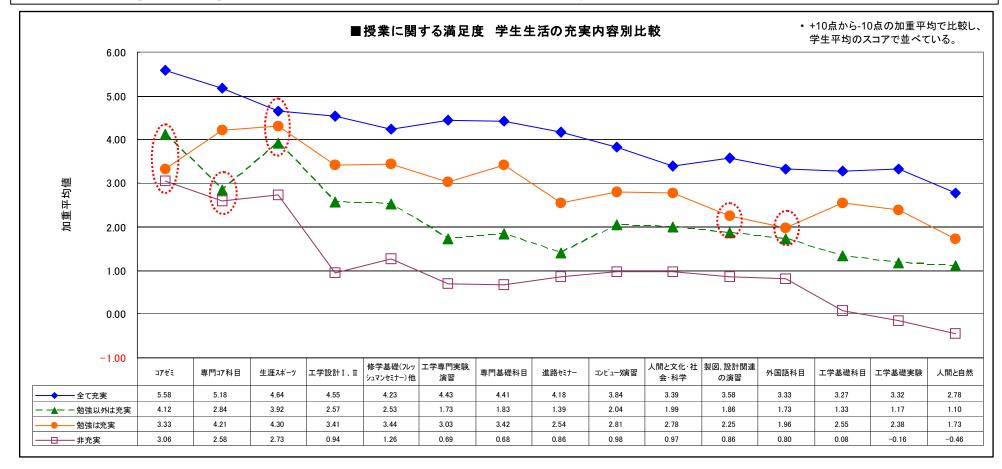
- 授業の満足度の加重平均を算出して、過去のデータの比較を行った。
- まず、05年で最も評価が高かったのは「コアゼミ」であり、これは03年、04年と同様であった。次いで「生涯スポーツ」「専門コア科目」「工学設計 I、II」「専門基礎科目」の評価が高かった。
- 今年度はマイナス評価になったものはなかったが、「人間と自然」が最も厳しい評価を受けており、次いで「外国語科目」「製図、設計関連の演習」 「工学基礎実験」「工学基礎科目」に厳しい評価をしていた。
- 04年から05年にかけては「修学基礎(フレッシュマンセミナー)他」がわずかに前年より評価を上げていたが、その他は全て評価を下げていた。
- 特に「工学専門実験、演習」「工学基礎科目」の評価は目立って下がっており、「専門基礎科目」「工学基礎実験」などの低下も目についたが、これらの満足度低下に関しての原因究明は優先順位を上げて行われるべきだと思われる。
- また、03年から継続的に評価が下がっているものとして、「コンピュータ演習」「進路セミナー」の2つがあり、これらにも対策が必要だと思われる。



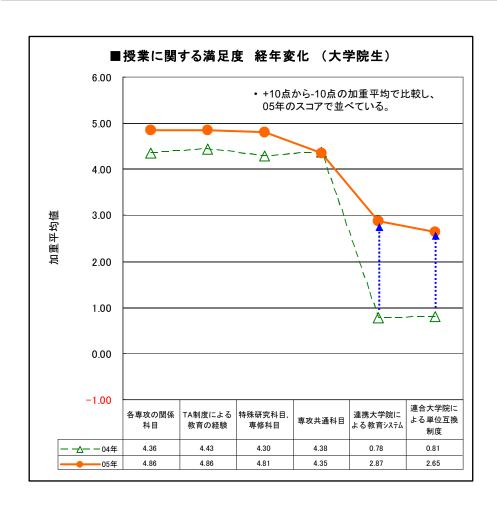
- まず、学年別の平均値を見ると、「Cクラス」が最も授業に対する満足度が高く、次いで「Jクラス」「卒業・修了直前」「1年次生」という順であった。
- 学年によって特徴があり、「1年次生」は学生平均を下回るものが多く、「工学設計 I、II」「専門基礎科目」「人間と文化・社会・科学」「工学基礎科目」「工学基礎実験」に対する満足度が低かった。そして「外国語科目」に対する満足度が高いという特徴があった。
- その他、特徴のあったのは「卒業・修了直前」で、「製図、設計関連の演習」「外国語科目」「人間と自然」の満足度が非常に低い。「Cクラス」は「コンピュータ演習」がやや低めであったが、「コアゼミ」「工学設計 I、II」の満足度が高いという傾向が見られた。
- 科目によっても特徴があり、「生涯スポーツ」は学年による評価の差が少なかったが、「工学設計 I、II」「工学基礎科目」「工学基礎実験」「製図、 設計関連の演習」「外国語科目」は学年による差が多めであった。
- これらを見ると「1年次生」の授業に対する満足度が低い点が気になるが、「まだ1年しか経っていないため大学に慣れていない」「当初の期待とは 異なっていた」などの要因があるのではないかと思われる。この「1年次生」の満足度の低さの原因を解明し、対処していくことで、その後の学生生 活の満足度を向上させることが可能になるのではないかと思われる。



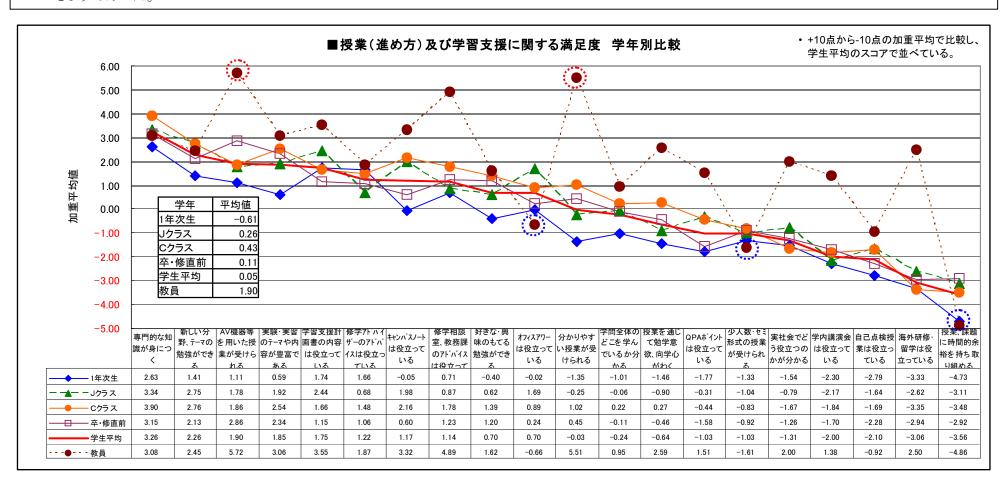
- ●「勉強に積極的に取り組めた」と「勉強以外に打ち込めているものがある」の2つから考えた学生生活の充実内容で、授業の満足度を比較した。
- まず、全体を見ると明らかであるが、勉強も勉強以外も充実している「全て充実」の満足度が前項目で最も高く、授業に対する満足度がうかがえる。次いで「勉強は充実」「勉強以外は充実」「非充実」という順であり、やはり「勉強以外は充実している」という層よりも「勉強は充実している」という層の方が授業に対しての満足度が高いことが確認できた。
- ただし、いつかの特徴も見られた。まず、「勉強以外は充実」と「勉強は充実」の層であるが、全般的には「勉強は充実」の方が高かったが、「コアゼミ」だけは逆転していた。これは「コアゼミ」は「勉強以外は充実」という層も興味を持って取り組んでいるということであり、「コアゼミ」の充実によって「勉強以外は充実」層に勉強にも興味を持たせて満足度を上げていくようなことも可能ではないかと思われた。そして、「勉強以外は充実」層では「専門コア科目」の満足度が低く、付いていけないといった状況があるのではないかと思われる。
- また、「勉強は充実」層は「製図、設計関連の演習」「外国語科目」などの満足度が低めであった。
- 「生涯スポーツ」は「非充実」層以外の差は少なく、どの層も満足しているようである。



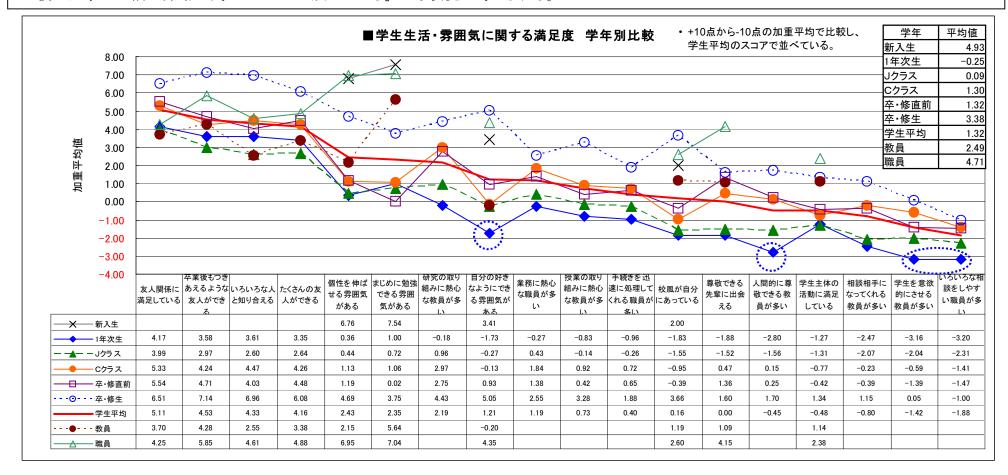
- 05年の大学院の授業の評価を見ると、「各専攻の関係科目」と「TA制度による教育の経験」が同スコアであり、「特殊研究科目、専修科目」もほとんど変わらなかった。そして、「連携大学院による教育システム」「連合大学院による単位互換制度」の満足度が低めであった。
- 04年との比較では、「連携大学院による教育システム」「連合大学院による単位互換制度」の満足度が非常に高くなっており、他大学との連携において何らかの改善が行われたのではないかと思われた。
- そして、「専攻共通科目」はわずかにマイナスであったが、その他の科目は昨年より少し満足度が高くなっており、大きな問題はなかったものと思われる。



- まず、学年別の平均を見ると、最も高かったのは「教員」であった。「教員」に対しては「授業は学生にとってどうであるか?」という聞き方で質問しているが、「学生にとって授業及び学習支援は良い状態にあると考えている」ようであった。そして、「Cクラス」の満足度が高く、「Jクラス」「卒業・修了直前」と下がってきており、「1年次生」は平均がマイナスであり、授業(進め方)及び学習支援に対する満足度が非常に低いことが分かった。
- 属性別の特徴を見ると「教員」は全般的に高く、「AV機器を用いた授業」「分かりやすい授業」などの面で自信を持っているようであった。逆に「オフィスアワーは役立っている」「少人数・ゼミ形式の授業が受けられる」といった面では実現できていないと感じていた。また、「授業・課題に時間的余裕を持ち取り組める」を見ると、教員自身が「学生に時間的な余裕がない」と感じていることが分かる。
- その他の属性では、「1年次生」は全般的に低めであり、なぜ、このように全ての評価が低いのかが気になった。そして、「Cクラス」は「専門的な知識が身につく」を始めとして学生の中では全般的に高めの評価であり、「Jクラス」は「学習支援計画書」「オフィスアワー」が役立っていると感じているようであった。



- 学年別の比較を行った。「新入生」や「教員」「職員」は設問数が少ないため比較が難しいが、平均値で比較すると「新入生」が最もスコアが高かった。「新入生」の回答のあった項目を見ると、「まじめに勉強できる雰囲気」「個性を伸ばせる雰囲気」を強く感じていることが分かった。
- 次いで「職員」が高く、「卒業・修了生」「教員」「卒業・修了直前」という順であり、卒業・修了した学生は学生生活や雰囲気を非常に良かったと感じており、「新入生」「教員」「職員」を除くと全ての項目で最もスコアが高かった。
- 最も低かったのは「1年次生」であり、平均値はマイナスであった。特に「自分の好きなようにできる雰囲気がある」「人間的に尊敬できる教員が多い」「学生を意欲的にさせる教員が多い」「いろいろな相談をしやすい職員が多い」などの低さが目立った。入学後1年でこのようなことを感じているということは、当初の期待通りではなかったといいた状況も考えられ、それを探ることも重要な事だと思われる。
- 上記の「1年次生」に次いで「Jクラス」が低めであったが、これらを見ると「新入生の段階では非常に期待が高いが、1年経った段階で当初の期待とは異なることが分かり、学生生活の満足度が低下している。そして、Jクラス、Cクラスから卒業に向けて徐々に学生生活の満足度が向上し、卒業後には学生生活が非常に良かったと心に残っている」という状況が考えられる。

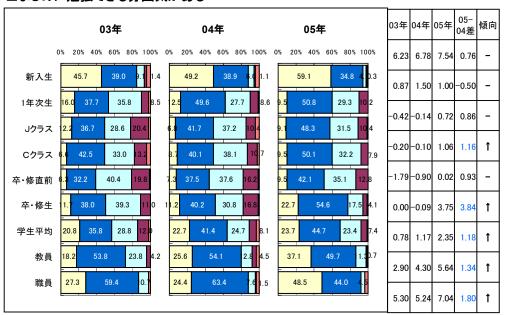


※グラフの色分けは下記の通りで、不明の数値は表示していない。

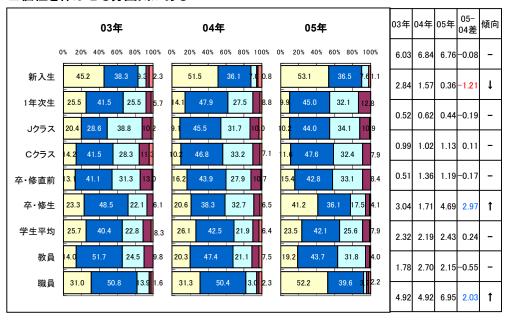
□そう思う □ややそう思う □あまりそう思わない ■そう思わない ■不明

- ※グラフの右にある数表は各クラスの加重平均を表しており、「差」は「05年」から「04年」のポイントを引いたものとなっている。
- ※「傾向」の矢印は「差」を視覚的に表したものであり、05年の数値から04年の数値をマイナスしたものが、1より大きい場合は「↑」として昨年より評価が上がったことを示している。また、-1より小さい場合は「↓」として評価が下がったことを示している。
- ※加重平均は「そう思う」に+10点、「ややそう思う」に+5点、「あまりそう思わない」に-5 点、「そう思わない」に-10点の荷重をかけて回答数で除している。なお、「不明」は回答者数に含めていない。
- ※「学生平均」は全体の回答数から算出したものではなく、「教員」「職員」を除いた各属性の平均値を足し合わせてその属性の数で除して算出している。
- ※03年の帯グラフの「学生平均」は学生平均の算出方法がパーセンテージの平均に なっていたため、全て集計し直した。なお、この数値は他の分析には使用していない ため、分析結果には影響はない。
- ※空欄となっている部分はその属性には聞いていない項目となる。

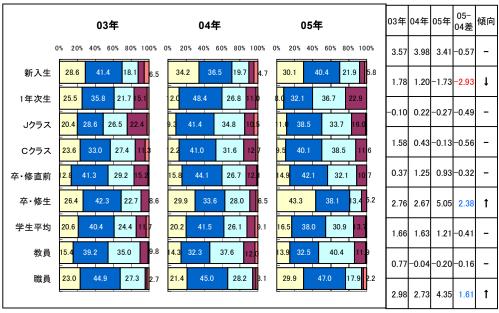
■まじめに勉強できる雰囲気がある



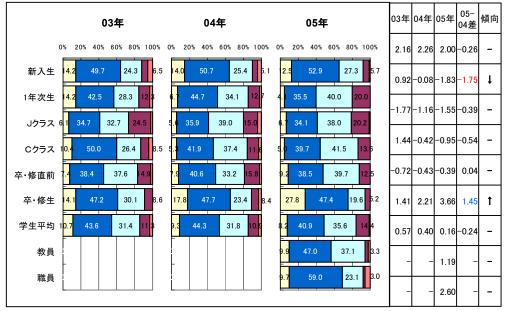
■個性を伸ばせる雰囲気がある



■自分の好きなように自由にできる雰囲気がある

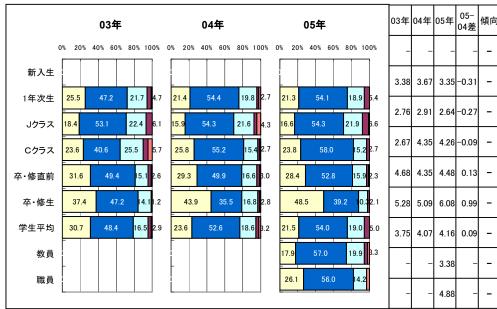


■校風が自分にあっている

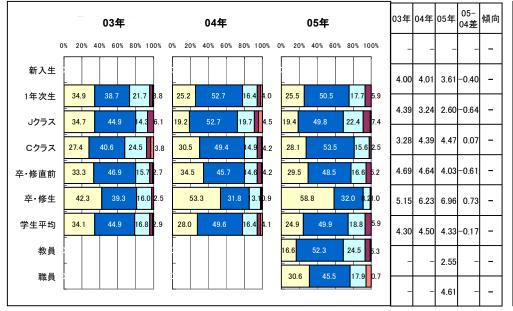


■たくさんの友人ができる

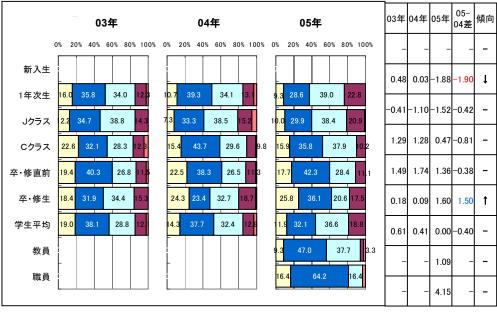
□そう思う



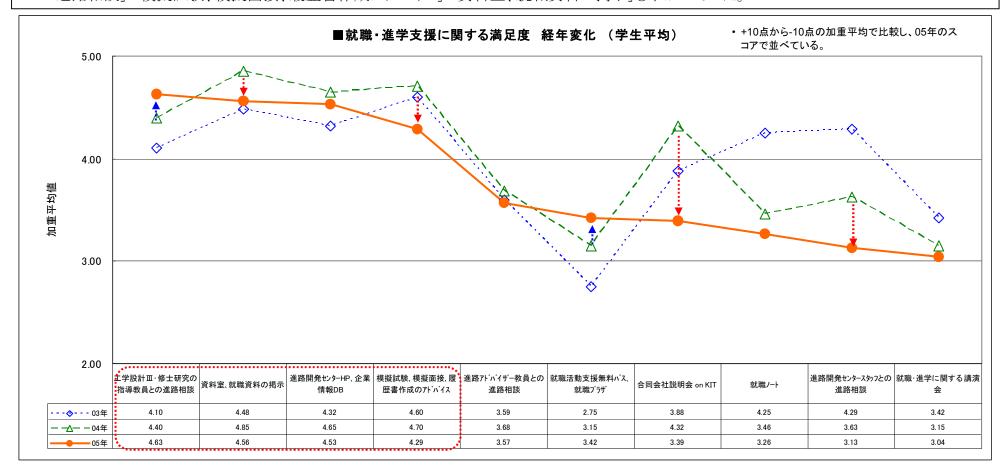
■いろいろな人と知り合える



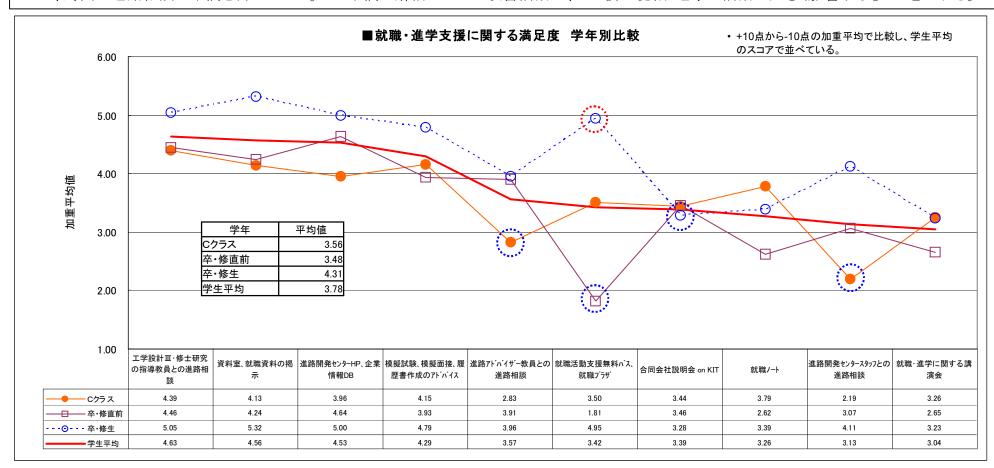
■尊敬できる先輩に出会える



- 就職・進学支援に関しての具体的な施策に関する評価を見たところ、下記のグラフのようになった。
- 05年の結果を見るとマイナス評価となったものはなかったが、評価の高いものと低いものに分かれる結果となった。評価が高かったのは「工学設計Ⅲ・修士研究の指導教員との進路相談」「資料室、就職資料の掲示」「進路開発センターHP、企業情報DB」「模擬試験、模擬面接、履歴書作成アドバイス」の4つであった。これは昨年度も評価が高かったものであった。
- ●「進路アドバイザー教員との進路相談」以下の6項目の評価は前述の4項目とは1段下がった評価であり、最も評価が低かったのは「就職・進学に関する講演会」であった。
- 04年と比較して評価が上がっていたのは「就職活動支援バス、就職プラザ」と「工学設計Ⅲ・修士研究での進路相談」だけであった。この2点は 03年より継続的に評価が上がっており、学生の支持を受けているものと思われる。
- 上記の2つ以外は昨年度より評価が下がっており、「合同会社説明会 on KIT」の低下が非常に大きかった。他にも「進路開発センタースタッフとの進路相談」「模擬試験、模擬面接、履歴書作成アドバイス」「資料室、就職資料の掲示」も下がっていた。



- まず、学年別の平均値を見ると、「卒業・修了生」の評価が高く、次いで「Cクラス」「卒業・修了直前」という順であった。
- 最も評価の高かった「卒業・修了生」に関しては、過去のことであり評価が高くなったことも考えられるが、全般的にスコアは高く、特に「就職活動支援バス、就職プラザ」の評価が突出していた。これは他大学には見られないものであり、卒業して他大学の状況を知って改めて評価し直しているといった状況が考えられる。全般的に評価の高かった「卒業・修了生」であるが、「合同会社説明会 on KIT」の評価は厳しいものであり、外部から見ると評価が低く見えるものと思われる。
- 「卒業・修了直前」は就職・進学活動を終えて間もない状況であったため、色々な不満が残っており厳しい評価になったものと考えられる。特に「就職活動支援バス、就職プラザ」に対する不満が大きかったが、卒業してしまうと評価が変わることが分かったため、印象が鮮明な時点で不満意見を聞き出すことが重要だと思われる。
- 「Cクラス」はこれから本格的に活動を始める層であるが、「進路アドバイザー教員との進路相談」「進路開発センタースタッフとの進路相談」といった、対面の進路相談に不満を持っていた。この不満の解消のための改善活動が、この後の就職・進学の活動に大きく影響するものと思われる。



「工学設計皿・修士研究の指導教員との進路相談」 「資料室、就職資料の掲示」などの評価が高い。

- □「工学設計Ⅲ・修士研究の指導教員との進路相談」「資料室、就職資料の掲示」「進路開発センターHP、企業情報DB」「模擬試験、模擬面接、履歴書作成アドバイス」の4項目は評価が高い。
- □ 最も評価が低かったのは「就職・進学に関する講演会」であった。

「就職活動支援バス、就職プラザ」と 「工学設計皿・修士研究での進路相談」は 継続的に評価が上がっている。

- □「就職活動支援バス、就職プラザ」と「工学設計皿・修士研究での進路相談」 は03年から継続的に評価を上げており、改善が奏功しているものと思われる。
- □「合同会社説明会 on KIT」は03年から04年にかけては評価を上げていたが、 04年から05年にかけては最も下がっていた。
- □「就職・進学に関する講演会」「就職ノート」「進路開発センタースタッフとの進路相談」は多少の差はあるものの継続的に評価が下がっているものであり、何らかの改善策が必要だと思われる。

就職指導の面では「企業情報」「職種・組織」「企業比較」など、 「情報不足」を感じている様子がうかがえた。

- □ 就職指導では「受験先企業についての情報がもっとほしかった」「職種や組織等、会社生活について教えてほしかった」「受験先を決定するのに必要な比較情報がほしかった」など、情報不足を感じているように思われた。
- □ 逆に、不満が少なかったものは、「受験先を決めるのは本人の自由意志に任せてほしかった」と「もっと丁寧に指導してほしかった」であった。
- □ 就職指導に関して昨年度と比較すると、「卒業・修了生」の不満が非常に少なくなっていた。

卒業すると「就職活動支援バス、就職プラザ」の評価が上がり、 全般的な評価も高くなるなど、

外部から見ることで評価が変わっていることが確認できた。

- □「卒業・修了直前」は就職・進学活動を終えて間もない状況であったため、 色々な不満が残っており厳しい評価になったものと考えられる。
- □ 「卒業・修了生」のスコアは全般的に高く、「就職活動支援バス、就職プラザ」 の評価が突出していた。これは他大学には見られないものであり、卒業して 他大学の状況を知って改めて評価し直しているといった状況が考えられる。
- □ 就職指導に関しても「卒業・修了生」の方が不満が少なく、在学中はビジネスマナーなどに不安を持っていたが、卒業するとそのような不安が解消しているという状況が確認できた。

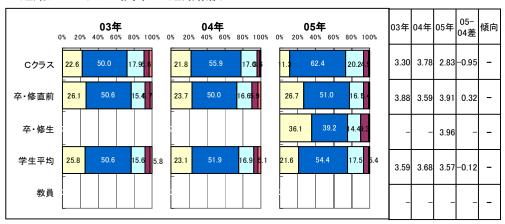
「就職活動支援バス、就職プラザ」と「工学設計皿・修士研究での進路相談」は継続的に満足度が向上していたが、 Cクラスで全般的に情報不足を感じているなどの課題も見られた。

そして、Cクラスと卒業・修了直前で回答傾向が変わり、卒業・修了してからも評価が大きく変わるなど、 置かれた状況で感じ方が大きく異なるため、改善のためには不満を感じている時にその不満を聞き出すことが重要だと言える。 ※グラフの色分けは下記の通りで、不明の数値は表示していない。

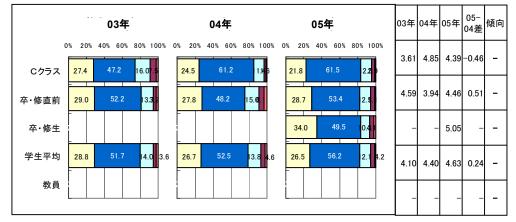
□満足	■まあ満足	□少し不満	■不満	■不明
ᆜᄱᇨ	■よめ河に	ロッしれ側	■ 1、川川	- 11.60

- ※グラフの右にある数表は各クラスの加重平均を表しており、「差」は「05年」から「04年」のポイントを引いたものとなっている。
- ※「傾向」の矢印は「差」を視覚的に表したものであり、05年の数値から04年の数値を マイナスしたものが、1より大きい場合は「↑」として昨年より評価が上がったことを示 している。また、-1より小さい場合は「↓」として評価が下がったことを示している。
- ※加重平均は「満足」に+10点、「まあ満足」に+5点、「少し不満」に-5点、「不満」に-10 点の荷重をかけて回答数で除している。なお、「不明」は回答者数に含めていない。
- ※「学生平均」は全体の回答数から算出したものではなく、「教員」「職員」を除いた各属性の平均値を足し合わせてその属性の数で除して算出している。
- ※03年の帯グラフの「学生平均」は学生平均の算出方法がパーセンテージの平均になっていたため、全て集計し直した。なお、この数値は他の分析には使用していないため、分析結果には影響はない。
- ※空欄となっている部分はその属性には聞いていない項目となる。

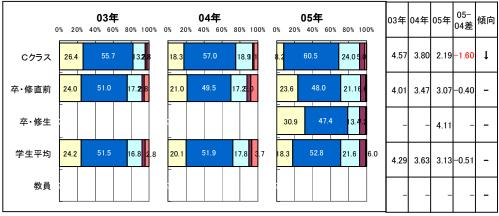
■進路アドバイザー教員との進路相談



■工学設計皿・修士研究の担当指導教員との進路相談



■進路開発センタースタッフとの進路相談



□満足

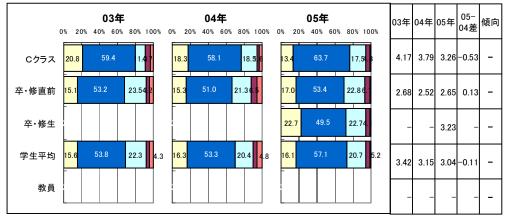
■まあ満足

□少し不満

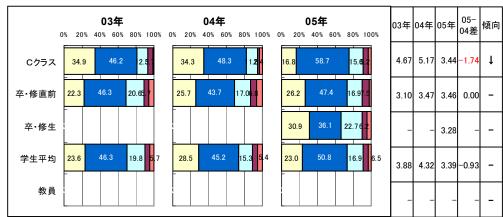
■不満

■不明

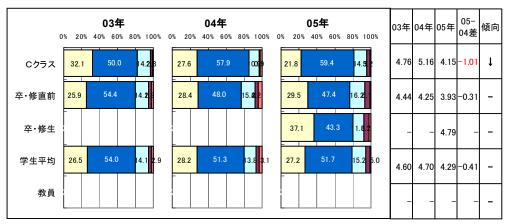
■就職・進学に関する講演会



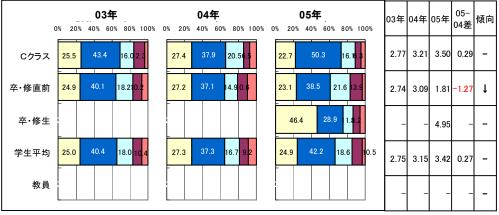
■合同会社説明会 on KIT



■模擬試験、模擬面接、履歴書作成のアドバイス



■就職活動支援無料バス、就職プラザ



□満足

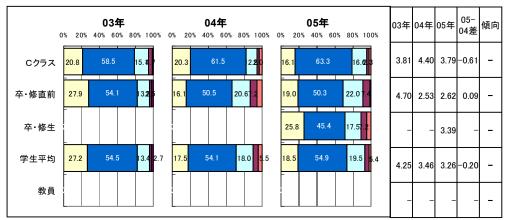
■まあ満足

□少し不満

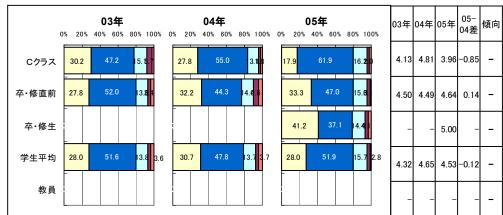
■不満

■不明

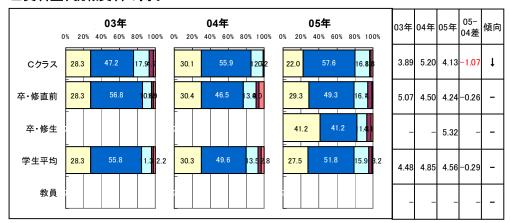
■就職ノート



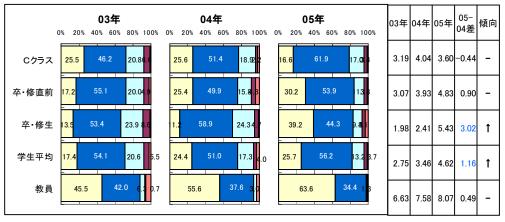
■進路開発センターHP、企業情報DB



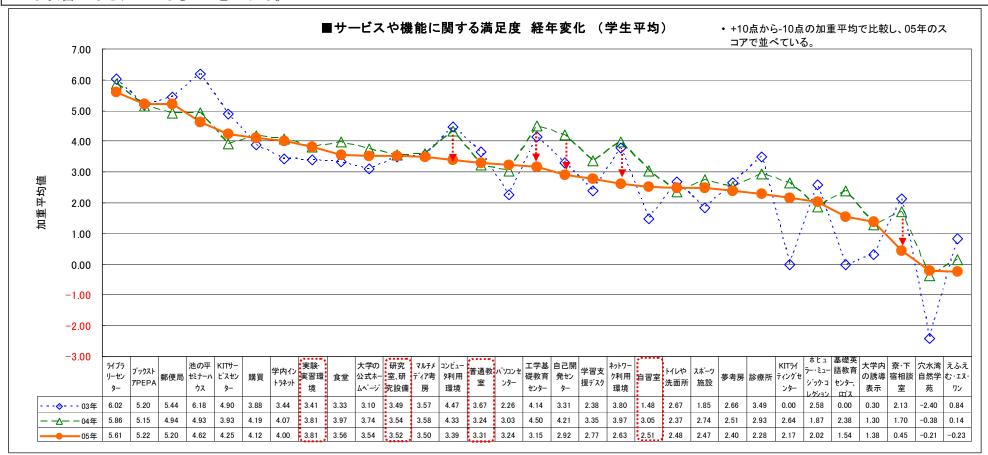
■資料室、就職資料の掲示



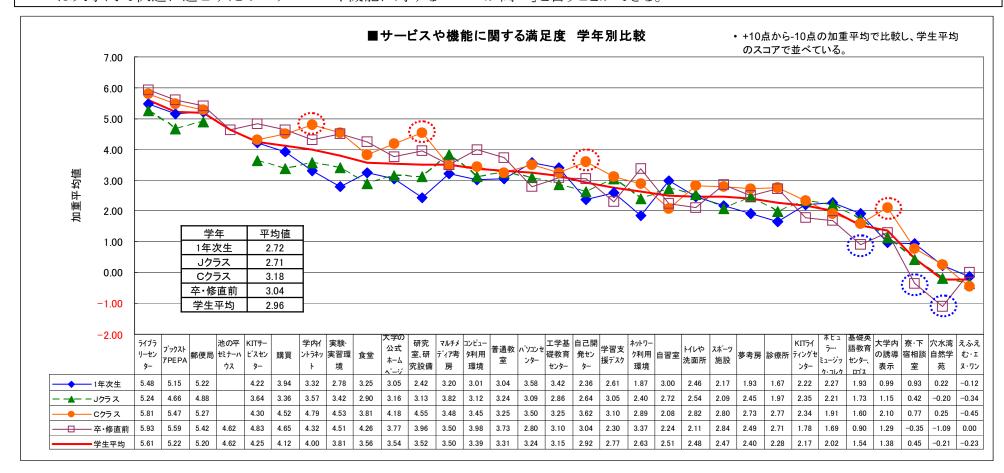
■総合的な就職・進学支援の満足度



- まず、05年のサービスや機能に関して最も評価が高かったのは「ライブラリーセンター」であった。そして、「ブックストアPEPA」「郵便局」「池の平セミナーハウス」「KITサービスセンター」などが続いていた。その他に評価の高かったものには「購買」「食堂」などが挙げられており、大学内で過ごすためのサービスや機能に対しての満足度は高かった。
- 05年でマイナス評価だったのは「えふえむ・エヌ・ワン」と「穴水湾自然学苑」の2つであった。そして、「寮・下宿相談室」「大学内の誘導表示」「基礎英語教育センター、ロゴス」などもマイナスではないものの評価は低めであった。
- 学習に関係する「実験・実習環境」「研究室、研究設備」「普通教室」「自習室」などを見ると中間的な評価であった。それほど不満はないが、十分に満足しているとは言いきれないものであった。
- 04年より評価が上がったのは「KITサービスセンター」「郵便局」「パソコンセンター」などで、上がり方はわずかであった。そして、「工学基礎教育センター」「自己開発センター」「ネットワーク利用環境」「寮・下宿相談室」「コンピュータ利用環境」などが下がったものとして目立っていた。
- そして、03年から継続的に評価を上げているものは「穴水湾自然学苑」「パソコンセンター」「大学内の誘導表示」の3つであり、これらでは継続的な改善がなされているものと思われる。



- 05年の結果を学年別に比較したところ、下記のようなグラフとなった。
- まず、全体の平均値を見ると「Cクラス」が最も評価が高かった。特に「学内イントラネット」「研究室、研究設備」「自己開発センター」「大学内の誘導表示」などの評価の高さが目立っていた。
- 次いで「卒業・修了直前」「1年次生」「Jクラス」という順であった。「卒業・修了直前」は評価の高いもので目立つものはなかったが、「穴水湾自然 学苑」「寮、下宿相談室」「基礎英語教育センター、ラーニングコーナー(ロゴス)」の評価が低い点が目立っていた。
- 「1年次生」は全般的に平均と近かったが、「実験・実習環境」「研究室、研究設備」「ネットワーク利用環境」といった、学習に関連する施設の評価が低い点が気になった。
- 一方、「Jクラス」は全般的に平均より低かったが、特に「ライブラリーセンター」「ブックストアPEPA」「郵便局」「KITサービスセンター」「購買」「食 堂」など、大学内で過ごすためのサービスや機能に対する評価が厳しかった。これらを見ると「1年次生は学習環境に対するニーズが高く、Jクラ スは大学内で快適に過ごすためのサービスや機能に対するニーズが高い」と言うことができる。



大学内で快適に過ごすためのサービスや機能の評価は高かったが、学習に関するものの評価は中庸であった。

- □「ライブラリーセンター」「ブックストアPEPA」「郵便局」「KITサービスセンター」「購買」「食堂」など、大学内で快適に過ごすためのサービスの評価は高かった。
- □「えふえむ・エヌ・ワン」と「穴水湾自然学苑」の2つは評価がマイナスであった。 そして、「寮・下宿相談所」「大学内の誘導表示」「基礎英語教育センター、 ラーニングコーナー(ロゴス)」などの評価も低く、今後の改善が期待されるも のであった。
- □ 学習に関係する「実験・実習環境」「研究室、研究設備」「普通教室」「自習室」などは、それほど不満はないが、十分に満足しているとは言いきれないものであった。

「穴水湾自然学苑」「パソコンセンター」「大学内の誘導表示」は 03年より継続的に改善されている。

- □「穴水湾自然学苑」「パソコンセンター」「大学内の誘導表示」は03年から04年にかけて、04年から05年にかけていずれも評価が上がっており、改善の跡がうかがえた。
- □ 今回の調査で昨年度より評価が上がっていたのは「KITサービスセンター」「郵便局」「パソコンセンター」を始めとして9つであり、他は評価が下がっていた。
- □ 調査票が変わった影響も考えられるが、「工学基礎教育センター」「自己開発センター」「ネットワーク利用環境」「寮・下宿相談室」は大きく評価が下がっており、学習に関連するものが多かった点が残念であった。

「Cクラス」がサービスや機能に対する評価が最も高く、 次いで「卒業・修了直前」「1年次生」「Jクラス」という順であった。

- □「Cクラス」が最もサービスや機能に対する評価が高く、特に「研究室、研究設備」「自己開発センター」「大学内の誘導表示」などの評価が他と比較すると高めであった。
- □ 次いで「卒業・修了直前」「1年次生」「Jクラス」という順であった。
- □「1年次生」で「実験・実習環境」「研究室、研究設備」「ネットワーク利用環境」 といった、学習に関連する施設の評価が低かった。
- □「Jクラス」は「ライブラリーセンター」「ブックストアPEPA」「郵便局」「KITサービスセンター」「購買」「食堂」など、大学内で過ごすためのサービスや機能に対する評価が厳しかった。

「1年次生」の評価が昨年度と比較して非常に厳しくなっていた。

- □ 学年別に昨年度との比較を行うと、「1年次生」はほとんどの項目が昨年度より評価が下がっていた。特に「穴水湾自然学苑」「実験・実習環境」「自己開発センター」「診療所」「大学内の誘導表示」などの評価の低さが目立っていた。
- □「1年次生」が最も下がっており、「Cクラス」「卒業・修了直前」「Jクラス」という順で、昨年と比較して評価は上がっていた。
- □「Jクラス」の評価は去年とあまり変わらず、「マルチメディア考房」「夢考房」の 評価が良くなった点が目立っていた。

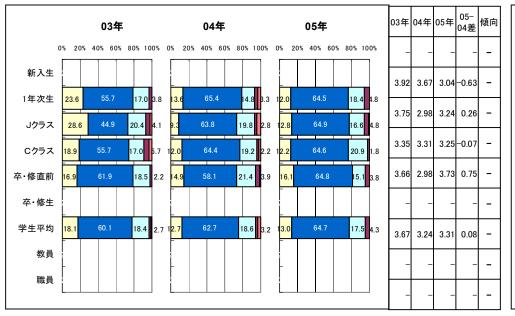
大学内で快適に過ごすためのサービスや機能の評価は高く、昨年度と比較しても大きく下がったものは見られなかった。しかし、学習に関するものに対する満足度は中庸であり、昨年より評価が下がっているものも見られた。また、1年次生は学習に関する評価が低いといった傾向も見られ、今後は大学で過ごすためのサービスや機能を維持しつつ、学習に関するサービスや機能の改善に力を入れていくべきだと思われる。

※グラフの色分けは下記の通りで、不明の数値は表示していない。

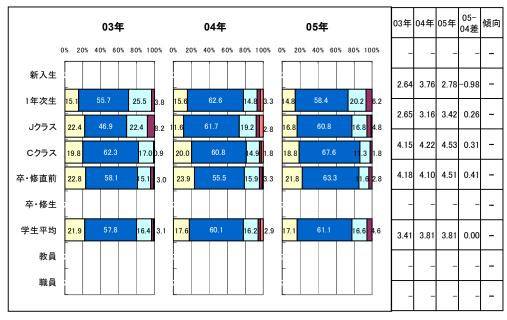
□満足 ■まあ満足 □少し不満 ■不満 ■不明

- ※グラフの右にある数表は各クラスの加重平均を表しており、「差」は「05年」から「04年」のポイントを引いたものとなっている。
- ※「傾向」の矢印は「差」を視覚的に表したものであり、05年の数値から04年の数値をマイナスしたものが、1より大きい場合は「↑」として昨年より評価が上がったことを示している。また、-1より小さい場合は「↓」として評価が下がったことを示している。
- ※加重平均は「満足」に+10点、「まあ満足」に+5点、「少し不満」に-5点、「不満」に-10 点の荷重をかけて回答数で除している。なお、「不明」は回答者数に含めていない。
- ※「学生平均」は全体の回答数から算出したものではなく、「教員」「職員」を除いた各属性の平均値を足し合わせてその属性の数で除して算出している。
- ※03年の帯グラフの「学生平均」は学生平均の算出方法がパーセンテージの平均に なっていたため、全て集計し直した。なお、この数値は他の分析には使用していない ため、分析結果には影響はない。
- ※空欄となっている部分はその属性には聞いていない項目となる。

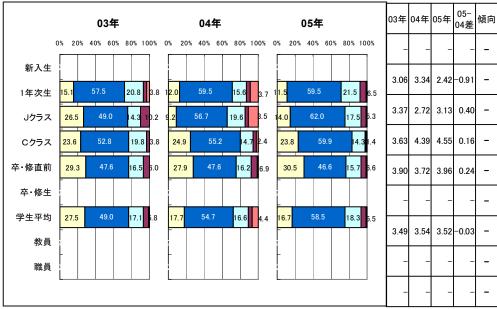
■普通教室



■実験・実習環境

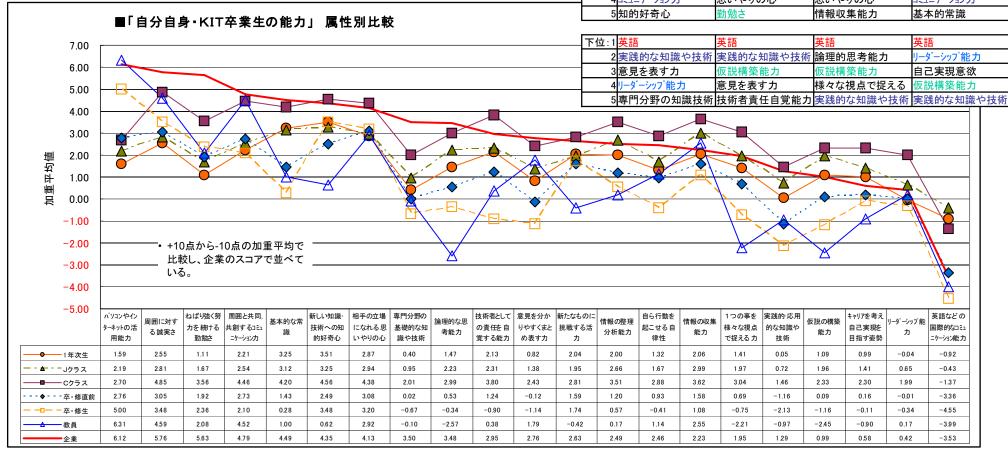


■研究室、研究設備

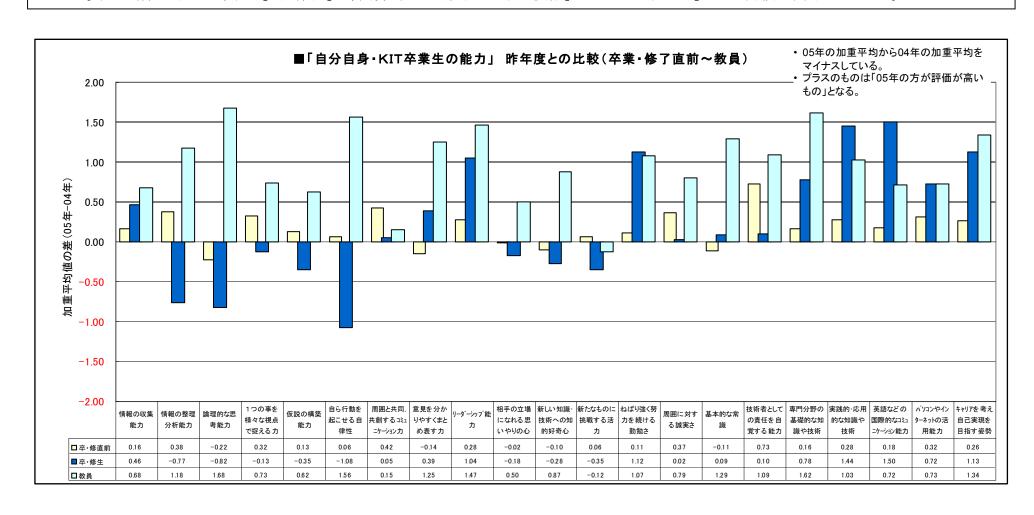


- 在学生と卒業・修了生には「自分の能力」、教員と企業には「KIT卒業生の能力」を聞いて比較を行った。
- まず、企業から最も評価が高かったのは「PCやインターネット能力」であり、次いで「誠実さ」「勤勉さ」「コミュニケーション力」「基本的常識」であった。評価が最も低かったのは「英語」であったが、これには「国際的なコミュニケーション能力」という言葉の影響もあるのではないかと思われる。 そして、「リーダーシップ能力」「自己実現意欲」「仮説構築能力」「実践的な知識や技術」などの評価が低めであった。
- 属性別に見ると「Cクラス」の自己評価が高めであり、「教員」と「卒業・修了生」の評価が低めであった。
- 「卒業・修了直前」「卒業・修了生」「教員」「企業」を比べた表を見ると、「PCやインターネット能力」と「誠実さ」は全属性から挙げられており、KIT 卒業生の強い点として自他共に認めているものと思われる。また、「勤勉さ」「コミュニケーション力」も強い点だと言える。
- そして、弱い点も共通認識があり、「英語」「仮説構築能力」「実践的な知識や技術」 が弱い点であり、「リーダーシップ能力」をつけることなども今後の課題だと言える。

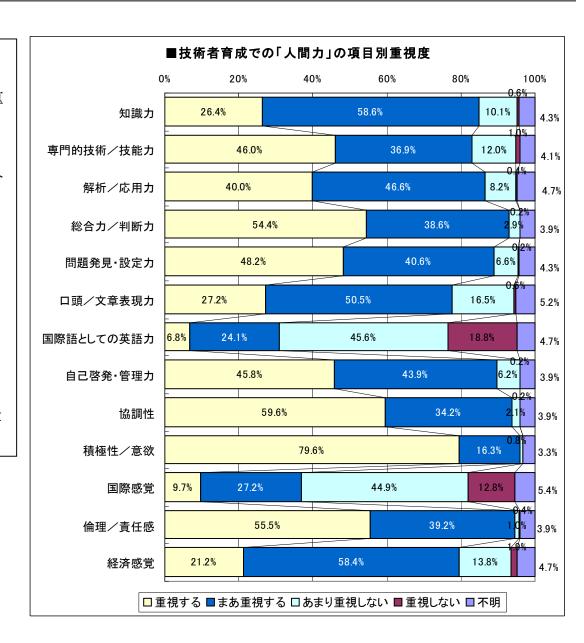
	卒∙修直前	卒∙修生	教員	企業
上位:1	思いやりの心	PCやインターネット能力	PCやインターネット能力	PCやインターネット能力
2	誠実さ	誠実さ	誠実さ	誠実さ
3	PCやインターネット能力	知的好奇心	コミュニケーション力	勤勉さ
4	コミュニケーション力	思いやりの心	思いやりの心	コミュニケーション力
5	知的好奇心	勤勉さ	情報収集能力	基本的常識



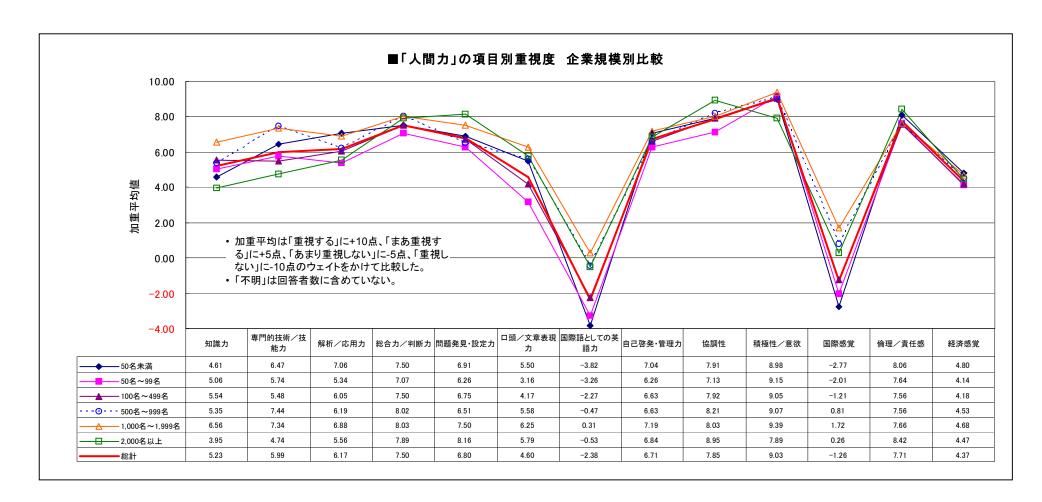
- 前項に引き続き、自分自身・KIT卒業生の能力に関する加重平均を、「卒業・修了生」から「教員」で昨年度との比較を確認した。
- まず、全体を見ると「教員」のKIT卒業生に対する評価が昨年度より非常に高くなっている点が目についた。そして、「卒業・修了直前」は多くの項目で昨年度よりも評価は上がっているものの、その差は小さいものであった。「卒業・修了生」はプラスになっているものも多かったが、大きくマイナスになっているものもあった。
- 「卒業・修了生」では「英語」「実践的な知識や技術」「勤勉さ」が良くなっている点が目についたが、「自律性」「論理的な思考能力」「情報の整理 分析能力」は大きくマイナスとなっていた。
- 「教員」は昨年度と同じ対象者にアンケートを実施しているので同じ条件で比較が可能であるが、昨年度と比較すると全面的に評価が良くなっていた。特に「論理的な思考能力」「自律性」「専門分野の基礎的な知識や技術」「リーダーシップ力」などの評価が高くなっていた。



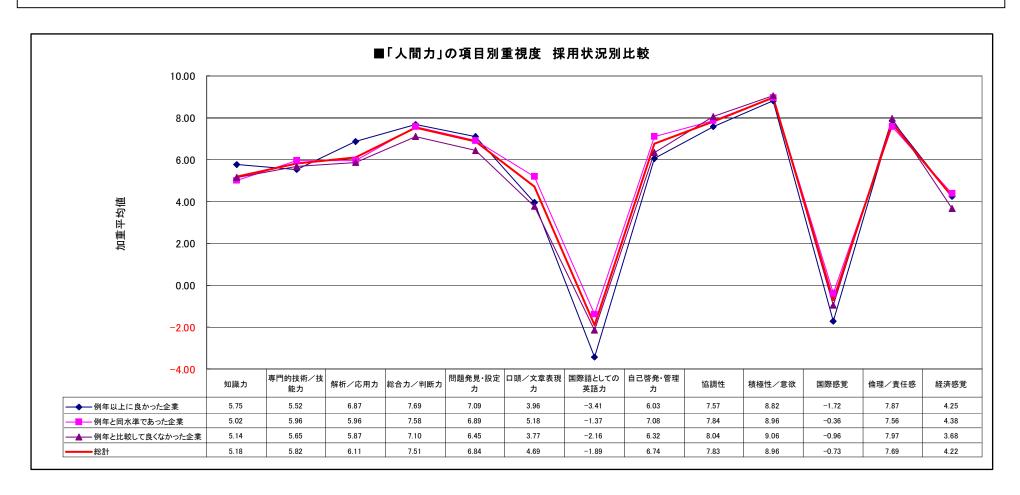
- 企業アンケートの「人間力」に関する項目をどの程度重視する かを聞いたところ、下記のような結果となった。
- まず、目立ったのは「国際語としての英語力」と「国際感覚」を重視するという意見が少なかった点であり、両者共に「重視する」が1割弱、「まあ重視する」が3割弱にとどまり、英語や国際感覚がそれほど重視されていないことが分かった。
- 上記以外の項目に関しては、「重視する」と「まあ重視する」を合わせた点を見ると、多くの項目で8割以上を占めているため、「重視する」だけで比較を行ったが、「積極性/意欲」を重視する企業が非常に多いことが分かった。
- ●「積極性/意欲」の重視度は突出していたが、それに次いで 「協調性」「倫理/責任感」「総合力/判断力」といった点が重 視されていた。
- そして、前出の英語や国際感覚に次いで重視度が低かったのは「経済感覚」「知識力」「口頭/文章表現力」といったものであった。
- これらを見ると「人間力」として重要なのは積極性や協調性、責任感といった人間としての基本的な姿勢であり、英語力や国際感覚、経済感覚、知識、表現力といった訓練可能なものは重要視されていないとまとめることができる。



- ●「人間力」の項目別の重視度を企業規模で比較した。この比較においても加重平均値を使用している。
- 全体を見る限り企業規模別にそれほど大きな差は見られないが、「50名未満」「50名~99名」という企業規模の小さな企業では全体的にスコアは低めであり、「総合力/判断力」「問題発見・設定力」「口頭/文章表現力」「英語力」「協調性」「国際感覚」などの重視度は低く、自社の技術者に対してここに挙げられる項目はそれほど求めていないようであった。
- そして、企業規模が大きいほど各項目の重視度は高めであり、「1,000名~1,999名」では「知識力」「専門的技術/技術力」「口頭/文章表現力」「国際語としての英語力」「国際感覚」などの即戦力を重視している傾向が見られた。
- 一方、「2,000名以上」という大企業では「知識力」「専門的技術/技術力」は重視せず、「問題発見・設定力」「協調性」「倫理/責任感」を重視しており、即戦力よりも組織への対応力を求めているように思われる。



- ●「人間力」の項目別重視度に関しても、採用状況によるスコアの差は少なかった。
- まず、全体を見ると採用状況の良し悪しと能力の重視度に相関関係はなく、各企業が各々の人材像を描いていることが考えられる。
- 例年と比較した採用状況の良し悪しで比較してみると、「例年以上に良かった」という企業は「知識力」「解析/応用力」「総合力/判断力」「問題発見・想定力」を重視しているが、「英語力」「国際感覚」を重視していない傾向が見られた。
- そして「例年と同水準」という企業は「専門的技術/技能力」「口頭/文章表現力」「英語力」「自己啓発・管理力」「経済感覚」といったものを重視しており、「知識力」を重視していなかった。
- ●「例年より良くなかった」という企業は「倫理/責任感」「積極性/意欲」「協調性」などを重視しており、「解析/応用力」「総合力/判断力」「問題発見・設定力」「経済感覚」などを重視していなかった。



■全アンケートからのまとめ

企業は新入社員に仕事に対する基本的な 取り組み姿勢ができていることを求めている。

- □ 企業が最も求めていたのは「勤勉さ」「コミュニケーションカ」「挑戦する活力」 「基本的な常識」「知的好奇心」であり、仕事に対する姿勢を重視している。
- □「英語」はあまり求められておらず、「実践的な知識や技術」「仮説構築能力」 「自己実現意欲」「情報の収集能力」など、即戦力といった能力の要望も弱 かった。ただし、これらは不要とされているわけではなく、一定のレベルは必 要とされていると解釈すべきだと思われる。

「卒業・修了直前」は新入社員に求められる能力の理解が浅く、 全ての能力を高いレベルで求められていると受けとっている。

- □ 「卒業・修了生」「教員」は企業の状況が分かっているため、新入社員に求められる能力の理解ができているようであった。
- □ しかし、「卒業・修了直前」は企業の状況が見えていないため、全ての能力を 高いレベルで求められていると感じている。どの能力もある程度は必要とさ れているが、企業によって求める能力が異なったり、自分の強い点を探し出 してアピールするなど、特に力を入れる点を考える指導も必要だと思われる。

企業はKITの卒業生を「誠実さ」「勤勉さ」「コミュニケーションカ」 といった仕事への取り組み姿勢で高く評価している。

- □ 企業はKITの卒業生に対して、「PCやインターネット能力」という点を最も高く 評価していたが、それに次いで「誠実さ」「勤勉さ」「コミュニケーション力」「基 本的常識」などの評価が高かった。
- □ 評価が高かったのは企業が重視していた「基本的な仕事への取り組み姿勢」 と同じ項目であり、企業の人材ニーズに合致していることが確認できた。
- □ 今後は、これらの能力を基本的なものとして、その上に挑戦や知的好奇心、 専門性といった能力をつけていくことが有効だと思われる。

企業のKIT卒業生評価は、学生自身や教員が考えている 以上に高く、大きな自信を持って良いと言える。

- □ 企業のKIT卒業生評価は、自己評価や教員の評価よりも全般的に高く、卒業 生はもっと自信を持って良いと言える。
- 特に教員評価を大きく上回るものが多かった。これは教員が厳しめに学生を 評価しているということであり、教員が考える以上に企業から良い評価を受け ているということも理解しておくべきだと思われる。
- □ また、数値だけでは見えないが、企業が卒業生をどう評価しているかを詳しく 知ることも今後のテーマになると思われる。

教員はKIT卒業生が情報の整理や論理的思考、仮説構築など 工学設計に属するような点で力がついていないと感じている。

- □「教員」「卒業・修了生」は卒業生の能力を厳しく評価しているが、「卒業・修了 直前」はやや楽観的に自己評価をしていた。
- □ 特に「教員」は「情報の整理」「論理的な思考」「様々な視点で捉える力」「仮説 構築能力」といった能力をもっとつけるべきだと考えている。
- 逆に、PCを使うことやPCを使った情報収集、プレゼンテーションなどに関して は高い能力を備えていると考えていた。

自己評価を昨年と比較すると「1年次生」が非常に厳しくなり、 「教員」が良い評価となっていた。

- □「1年次生」は昨年度より自己評価が非常に厳しくなっており、学生層が変化するなど要因があるものと考えられる。特に「英語」「実践的な知識や技術」「専門分野の基礎的な知識や技術」「勤勉さ」などが厳しくなっていた。
- □「教員」は全体的に良い評価となっていた。回答対象者が同じであるため、何らかの変化があったと思われる。特に「論理的な思考能力」「自律性」「専門分野の基礎的な知識や技術」「リーダーシップカ」などの評価が高くなっていた。

■企業アンケートからのまとめ

企業は、「人間力」として重要なことは「積極性」や「協調性」 「責任感」といった、人間としての基本的な姿勢だと考えている。

- □ 人間力としては「積極性/意欲」を求めるという意見が突出して多く、非常に 重視されていることが分かった。
- □ 次いで「協調性」「倫理/責任感」「総合力/判断力」などが重視されており、 これらを見ると人間としての基本的な姿勢が重視されていることが分かる。
- そして、重視度が低かったのは「英語力」「国際感覚」「経済感覚」「知識力」 「口頭/文章表現力」といったものであった。ただし、これらは全く必要とされ ていないということではなく、一定レベルは保っておく必要があると言えるべき ものであり、軽視すべきものではない。

KIT卒業生は「PCやインターネット活用力」「誠実さ」「勤勉さ」が評価されており、「自律性」「挑戦」などが今後の課題であった。

- □ 企業がKIT卒業生の能力として高く評価していたのは「パソコンやインター ネットの活用能力」「誠実さ」「勤勉さ」「コミュニケーションカ」「基本的な常識」 などであった。
- 特に「パソコンやインターネットの活用能力」は求められているレベルとほぼ 一致し、「誠実さ」「基礎的な知識や技術」「思いやりの心」なども強みと言える。
- □ 一方、「自律性」「挑戦する活力」は企業が求めているにもかかわらず、KIT 卒業生の評価は低めであり、これらが今後の課題になると思われる。

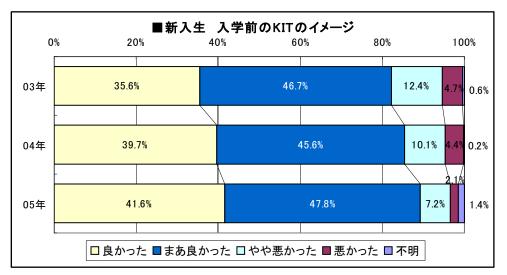
新入社員に求める能力は「勤勉さ」「コミュニケーション力」「挑戦する活力」「基本的な常識」「知的好奇心」「自律性」であった。

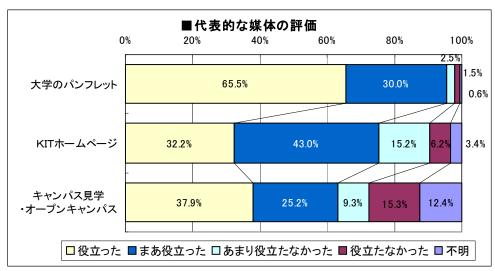
- □ 企業が新入社員に求めている能力のトップ5は「勤勉さ」「コミュニケーション カ」「挑戦する活力」「基本的な常識」「知的好奇心」「自律性」であり、真面目 で何事にも積極的に取り組むような姿勢を求めていた。
- □ 一方、「英語などの国際的コミュニケーションカ」を求める意見は非常に少な く、「実践的な知識や技術」「仮説構築能力」「自己実現を目指す姿勢」「情報 の収集能力」といった実践的な能力もあまり求められていないようであった。

企業から見た「KIT卒業生と他大学卒業生との評価の差」 を見ることも今後の大きなテーマと言える。

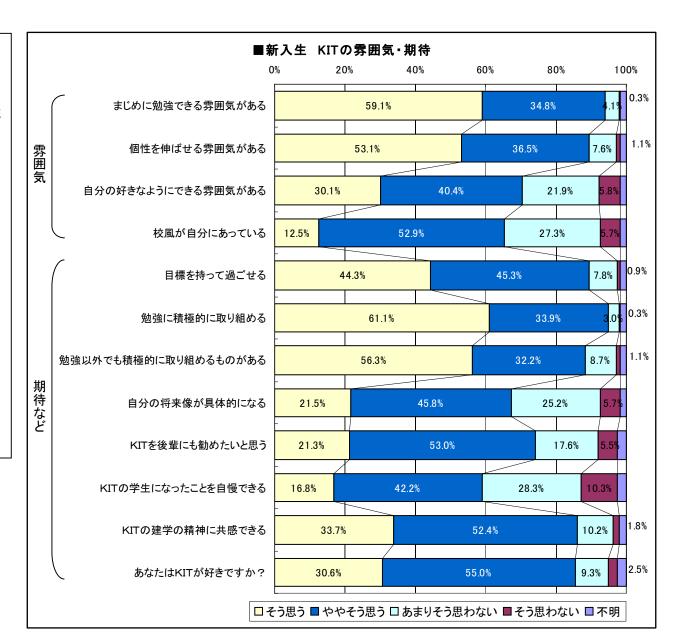
- □ 現在は企業が理想とする新入社員像とKIT卒業生の差しか見えず、現実的なレベルでどのような能力が武器になり、何が不足しているのかが見えてこない部分がある。
- □ 企業から見た「KIT卒業生と他大学卒業生との評価の差」をどのようにして確認するかが情報収集においての大きなテーマに据えるべきだと思われる。

- ●「入学前のKITのイメージ」に関しては03年より継続的に良くなっている傾向にあり、03年に「良かった」と「まあ良かった」の合計が82.3%であった ものが、04年には85.3%、05年には89.4%と、約9割が入学前にKITに良いイメージを持つに至っていた。これは日頃の広報戦略が奏功したもの と思われるが、受験生の間に良いイメージが広まっているということは非常に良い状況であると言える。
- 代表的な3つの媒体の個々の評価は05年から聞いているが、やはり「パンフレット」の評価が非常に良いことが確認できた。「パンフレット」に関しては「役立った」が65.5%、「まあ役立った」が30.0%であり、非常に有効利用されていることが分かる。
- 「ホームページ」に関しては不明(無回答)が3.4%であり、「利用しなかった」という回答ではないものの、ほぼ全ての新入生が利用していたと考えられる。そして、評価としては「役立った」が32.2%、「まあ役立った」が43.0%と、75.2%は有効だったと答えていた。
- 「キャンパス見学・オープンキャンパス」では12.4%が不明(無回答)であり、参加していないと思われる新入生も多かった。また、「役立たなかった」という回答の中にも不参加者が含まれるものと思われる。しかし、「役立った」は「ホームページ」よりも多く、参加者からは評価が高いと言える。

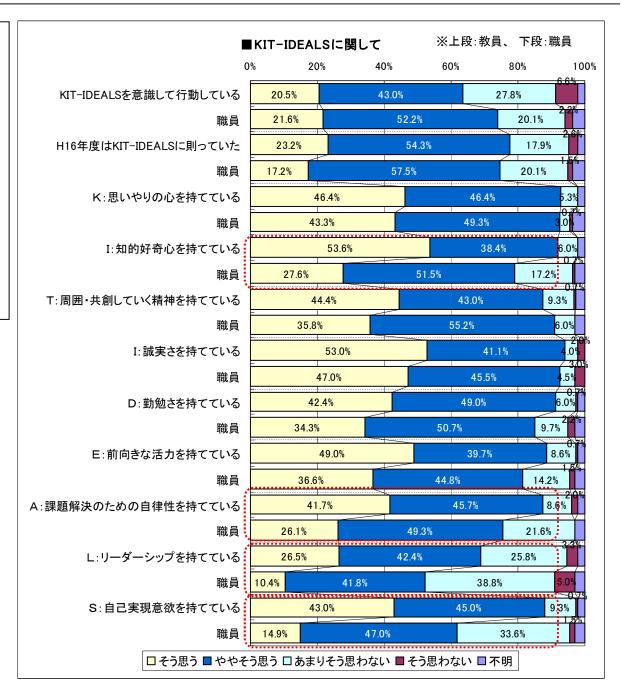




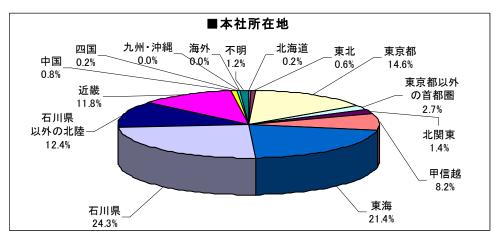
- ここでは新入生だけで「KITの雰囲気・期待」に ついての分析を行った。
- 「雰囲気」に関しては下記のようにまとめられる。
 - まじめに勉強できる雰囲気があると感じており、個性 も伸ばせそうだと思っている。
 - しかし、自分の好きなように過ごせると感じている学生ばかりではない。
 - 校風自体の理解度は分からないが、自分によく 合っていると感じているわけではなく、何となく合っ ているといった状況だと思われる。
- 一方、「期待など」は下記のようにまとめられる。
 - 大学では目標を持って、勉強や勉強以外で積極的 に取り組めそうだと感じており、非常に前向きな姿 勢が感じられる。
 - そして、KITが好きだと感じている新入生は30.6%、 まあ好きは55.0%と、大部分がKITに愛着を感じて いる。
 - しかし、KITの学生になったことを自慢できる学生は 59.0%と、それほど多いわけではなかった。
 - また、後輩に勧めたいという意見が74.3%、将来像が具体的になってきたという意見が67.3%と、まだ周囲が不明確で不安を感じている新入生も多いものと思われる。

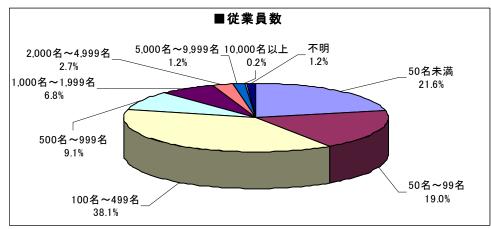


- 平成16年度はKIT-IDEALSに掲げられた行動規範にどれだけ則って行動できたかを確認した。帯グラフは上が教員で、下が同じ質問への職員の回答となっている。
- 全体的に見ると全ての項目で「そう思う」と「ややそう思う」を合計したものは過半数を超えており、多くの教職員はKIT-IDEALSに則った行動ができていたと言える。
- 項目別に見ると「K:思いやりの心を持てている」「I:誠実 さを持てている」といった点の達成度が高かった。
- 教職員別に見ると、教員の方が「そう思う」「ややそう思う」という回答が多い設問が多く、平成16年度に関しては教員の方がKIT-IDEALSに対する達成度は高かったようであった。
- このグラフでは詳細が比べにくいため、次項では加重平均で比較を行った。



- 今回のアンケートで回答のあった485社の内訳は下記の通りであった。
- KIT卒業生が入社した企業が母集団であるため、「本社所在地」は「石川県」が最も多く118社であり、全体の24.3%を占めた。そして、石川県以外の北陸が60社であり、合わせると北陸地方の企業が178社と36.7%を占めていた。
- 北陸以外の地域では、「東海」が104社、「東京都」を含む「首都圏」が84社、「近畿」が57社というものであった。
- 次に、「従業員数」では「100名~499名」が最も多く38.1%を占めており、次いで「50名未満」が21.6%、「50名~99名」が19.0%という割合であり、 合わせると500名未満が78.7%を占めていた。
- なお、後段で企業規模による状況の違いを見る際に「従業員数」を軸としてクロス集計を行ったが、2,000名以上は該当する企業が少なかったため、1つのグループとして扱っている。

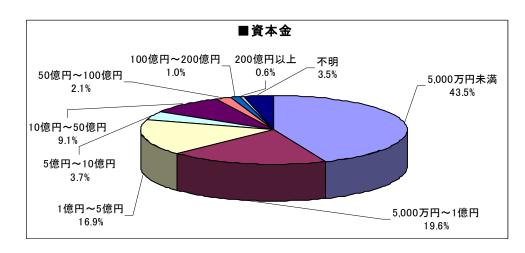


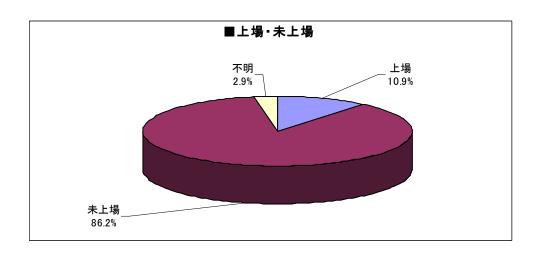


■本社所在地内訳

	回答数	構成比	
北海道	1	0.2%	
東北	3	0.6%	
東京都	71	14.6%	
東京都以外の首都圏	13	2.7%	
北関東	7	1.4%	
甲信越	40	8.2%	
東海	104	21.4%	
石川県	118	24.3%	
石川県以外の北陸	60	12.4%	
近畿	57	11.8%	
中国	4	0.8%	
四国	1	0.2%	
九州•沖縄	0	0.0%	
海外	0	0.0%	
無回答	6	1.2%	
全体	485	100.0%	

- 「資本金」に関しては「5,000万円未満」が最も多く、43.5%と半数近くを占めていた。次いで「5,000万円~1億円」が19.6%、「1億円~5億円」が16.9%という順であった。
- ●「上場・未上場」に関しては「未上場」が86.2%と大多数を占めており、「上場」は10.9%にとどまっていた。ただし、この数値は今回の回答企業のものであり、KIT卒業生の入社企業の規模とは異なる。
- ●「業種の内訳」では「建設業(総合・設備工事)」が最も多く23.3%を占めていた。次いで「製造業(一般・電気・輸送用機器・精密機械)」が20.4%、サービス業(コンピュータ・情報サービス)が13.0%という順であった。
- 大きな括りで見ると「製造業」が32.8%であり、次いで「建設業」23.3%、「サービス業」23.1%であり、この3業種で79.2%を占めていた。

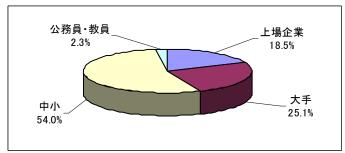




■業種内訳

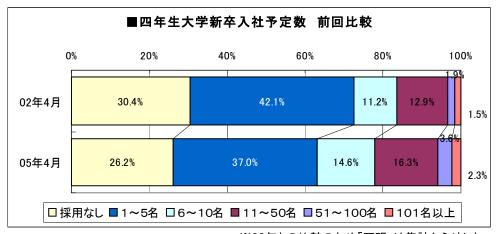
	回答数	構成比1	構成比2
建設業(総合・設備工事)	113	23.3%	23.3%
製造業(鉄鋼、非鉄金属、金属機械)	27	5.6%	
製造業(一般・電気・輸送用機器・精密機械)	99	20.4%	32.8%
製造業(繊維、化学、木製品、その他)	33	6.8%	
卸売·小売業、金融·保険業、不動産業	41	8.5%	8.5%
運輸·通信業	3	0.6%	0.6%
サービス業(コンピュータ・情報サービス)	63	13.0%	
サービス業(設計、コンサルタント)	33	6.8%	23.1%
サービス業(医療、教育、放送、その他)	16	3.3%	
公務員·教員	13	2.7%	2.7%
その他	25	5.2%	5.2%
不明	19	3.9%	3.9%
総計	485	100.0%	100.0%

<参考>03年から04年のKIT卒業生の就職実績

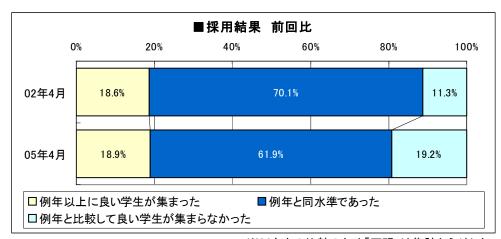


※ここでは大企業とは「資本金3億円以上」もしくは 「従業員300名以上」とし ている。

- 05年4月の四年生大学卒業者(大学院含む)の入社予定数に関しては、「採用なし」が26.2%と1/4程度を占めたものの、「1~5名」が37.0%、「6~10名」が14.6%、「11~50名」が16.3%という状況であった。
- 02年にも同じ質問をしているため比較を行ったところ、05年の方が採用の動きが積極的になっている状況が見られた。まず、「採用なし」は02年の30.4%から05年には26.2%へと4.2ポイント減少していた。そして、「1~5名」は5.1ポイント減少したものの、「6~10名」は3.4ポイント増加、「11~50名」は3.4ポイント増加という状況であった。
- 05年の採用結果の例年との比較を聞いたところ、「例年以上に良い学生が集まった」は18.9%であり、「例年と同水準であった」が61.9%、「例年と比較して良い学生が集まらなかった」が19.2%であった。
- 採用結果に関して02年と比較すると、「例年以上に良い学生が集まった」は変わらず、「例年と比較して良い学生が集まらなかった」が7.9ポイント増加しており、全体としては02年よりも採用に関して苦心している状況がうかがえる。
- 厳密には回答企業が異なるために断言はできないが、02年と比較すると良い学生の確保には苦労しているが、採用数は増加しているという状況であった。

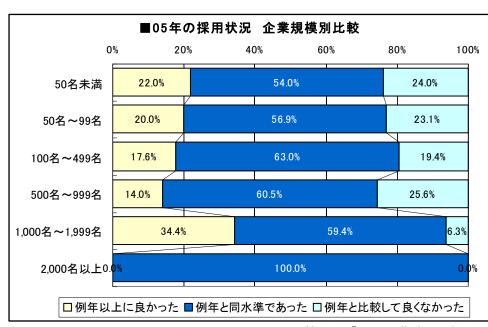


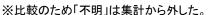
※02年との比較のため「不明」は集計から外した。

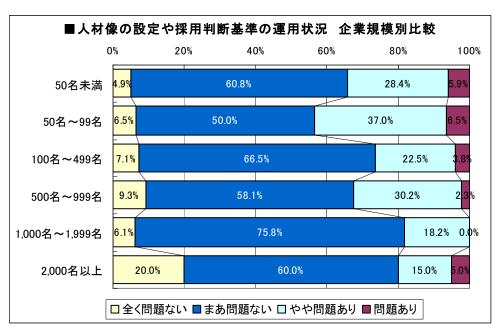


※02年との比較のため「不明」は集計から外した。

- 企業規模として「従業員数」別に採用状況を比較した。なお、2,000名以上は該当する企業が少なかったため、1つのグループとして集計した。
- 05年の採用状況の企業規模別の比較を見ると、従業員数が「2,000名以上」という大きな企業では100%が「例年と同水準」と答えていた。これは、 大企業では採用に関するルールや方法が確立されているため、年による変動が少なくなるのではないかと思われる。
- 次に目に付いたのは「1,000~1,999名」の企業であり、例年と比較するとかなり良かった様子であった。そして、999名以下の4つのカテゴリーを 見ると、従業員数が少ない企業ほど「例年以上に良かった」という回答が多いようであった。詳細は不明であるが、従業員の少ない小さい企業で 良い採用ができるようになってきているという解釈ができる。
- 採用に関する各種作業の運用状況に関しては、多少の食い違いはあるが従業員数が多くなるほど問題が少なくなる傾向が見られ、「2,000名以上」では20.0%は「全く問題ない」、60.0%は「問題ない」と回答しており、大企業ほど採用に関する環境が整備されていることが分かった。
- ただし、企業規模が小さいからと言って非常に多くの問題を抱えているというわけではなく、「50名未満」の企業では「全く問題ない」は4.9%と少なかったものの、「問題ない」と合わせると65.7%は問題が見られないとのことであり、最も問題が多かった「50名~99名」の企業でも56.5%と過半数は問題を抱えていないと答えていた。

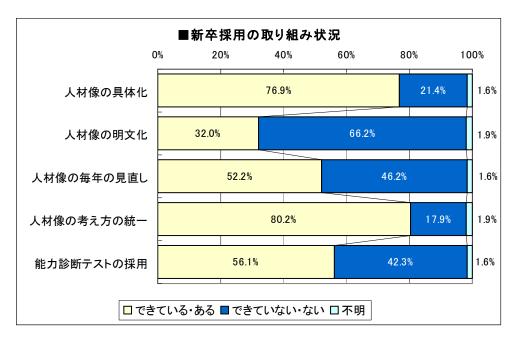


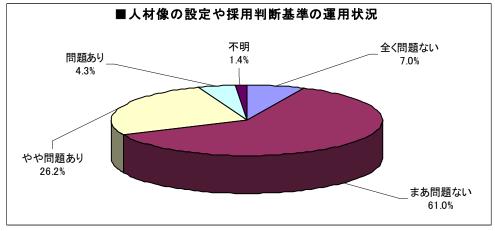




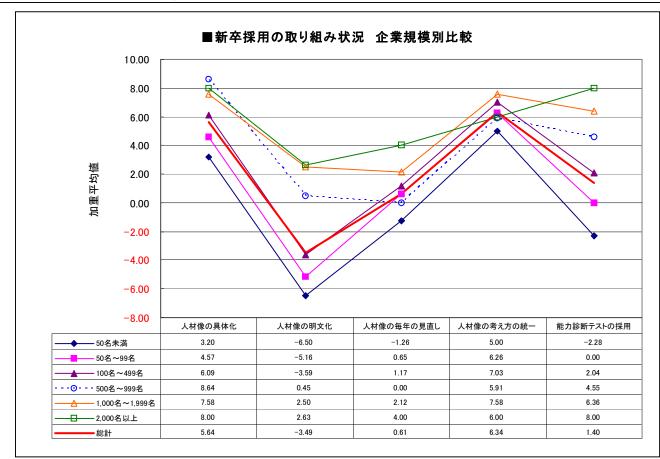
※比較のため「不明」は集計から外した。

- 今回より各企業の採用に関する取り組み状況を聞いたところ、下記のような結果であった。
- まず、徹底できているものを見ると、「(新卒採用に関する)人材像の具体化」は76.9%の企業でできており、「(採用担当スタッフ間で採用すべき)人材像の考え方の統一」という面では80.2%の企業でできているという回答であった。
- そして、「人材像の明文化」は32.0%の企業しか実施できておらず、「人材像の毎年の見直し」は52.2%と半数の企業で行われていた。
- これらをまとめると、新卒の採用に関しては、76.9%の企業で人材像が具体化されており、80.2%の企業でスタッフ間の考え方が統一されている。 各企業で課題と捉えているとは限らないが、人材像の明文化ができているのは32.0%にとどまっており、毎年、人材像の見直しが行われているのは52.2%の企業であった。そして、能力診断テストは56.1%の企業で行われていた。
- 上記を全て網羅した「新卒採用に関する人材像の設定や採用判断基準の運用」に関しては、「全く問題ない」が7.0%、「まあ問題ない」が61.0%であり、合わせると68.0%は現状に問題を感じていないようであった。しかし、「問題あり」と「やや問題あり」を合わせると30.5%の企業では何らかの課題を抱えているようであった。



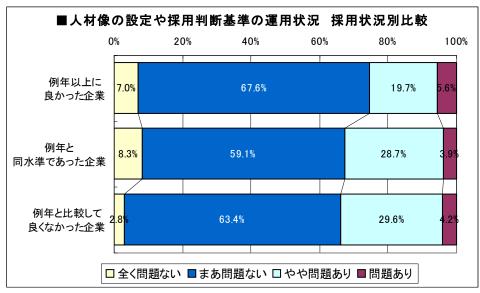


- 新卒採用の取り組み状況に関しては、加重平均によって企業規模(従業員数)別の比較を行った。
- まず、全体を見ると、従業員が少ないほどスコアが低いという傾向が見られた。これは企業規模が小さいほど「人材像の具体化」「人材像の明文化」「人材像の毎年の見直し」「人材像の考え方の統一」といった対応が十分にできていないということであり、ほぼ企業規模順に並んでいた。
- ●「能力診断テスト」に関しても企業規模が大きいほど採用されている割合が高い傾向が見られた。
- ●「人材像の明文化」と「人材像の考え方の統一」の2点には少し特徴があった。
- ●「人材像の明文化」は「50名未満」「50名~99名」「100名~499名」では非常に低く、マイナススコア(半数以上が「いいえ」という回答)であったが、 それ以上の企業規模ではプラススコアであり、500名以上の会社規模になると人材に関して文章で定義しているケースが増えるようであった。し かし、「1,000名~1,999名」と「2,000名以上」の間に差がないように、人材像を明文化する企業の割合は一定割合でとどまるといえる。
- ●「人材像の考え方の統一」に関するスコアは「2,000名以上」で低めであったが、これは採用担当者が増加することで考え方の統一が難しくなるなどの要因が考えられる。

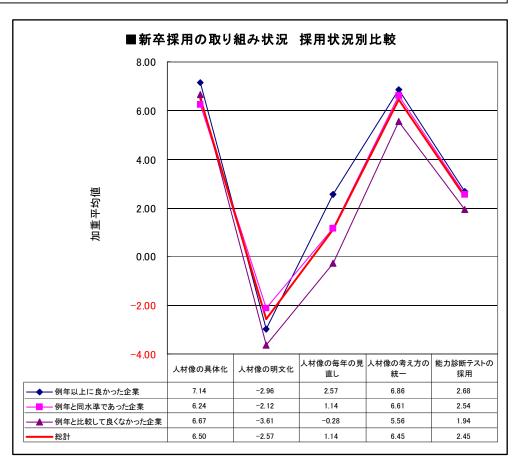


- 加重平均は「はい」の回答数に+10点、「いいえ」の回答数に-10点を掛けて回答者数で除して算出した。従って、最高点が10点で最低点がマイナス10点となる。
- 「不明」は回答者数に含めていない。

- 05年4月の採用状況をクロス集計の軸として、採用がうまくいった企業は何が違っていたのかを探ってみた。
- まず、採用状況別に採用に関する人材像の設定や採用判断基準の運用状況を見た。「全く問題ない」と「まあ問題ない」の割合では言い切れないが、その2つの選択肢を合わせたものをみると、「例年より採用状況が良かった企業」ほど採用に関する各種作業の運用状況に問題がなかったことが分かる。
- 次に新卒採用の取り組み状況を見ると、全体的には新卒採用が「例年以上に良かった企業」は各取り組みに積極的であり、「例年より良くなかった企業」は取り組みに消極的という傾向が見られた。
- ただし、「人材像の明文化」は例外で、「例年と同水準であったという企業」の方が積極的に取り組んでおり、「求める人材が明文化されている企業は、常にレベルが同じで例年通りの採用ができている」と解釈することができる。
- そして、「人材像の毎年の見直し」は差が大きく、「求める人材像を年毎に見直している企業はその時点での人材ニーズが明らかになっているために、適材が採用できている」と考えることができる。



※比較のため「不明」は集計から外した。



■採用の現状に関して (人材に関するまとめは「<8>「人材の能力」に関して」で学生、教員と一緒に分析した。)

02年と比較すると良い学生の確保は難しくなっているが、 採用数は増加している。

- 05年の採用は「採用なし」が26.2%であったが、「1~5名」が37.0%、「6~10 名」が14.6%、「11~50名」が16.3%であり、02年と比較すると入社予定人数は増加しており、採用が積極的になっていた。
- □「例年以上に良い学生が集まった」という意見は2割程度と02年と変わりなかったが、「例年と比較して良い学生が集まらなかった」という意見は1割から2割に増加しており、良い学生の確保は難しくなっているようであった。

例年より良い採用ができた企業は各種の取り組みに積極的であり、 特に「求める人材像の見直し」を頻繁に行っていた。

- 例年より良い採用ができた企業は採用ルールの運用上の問題が少なく、各種取り組みにも積極的であった。そして、それらの企業は「人材像の毎年の見直し」を行っている割合が高く、常に最新の人材ニーズをまとめていた。
- □ そして、「求める人材が明文化されている企業は、常にレベルが同じで例年 通りの採用ができている」という状況が確認できた。

新卒採用の人材像設定や採用基準などの運営は、7割の企業で問題なく進んでいると考えられていた。

- □ 採用時の人材像の設定や採用判断基準の運用に関しては、「全く問題ない」が7.0%、「まあ問題ない」が61.0%であり、合わせると68.0%は現状に問題を感じていなかった。
- □ 具体的な内容では、「人材像の具体化」「人材像の考え方の統一」は約8割の 企業で実施されていた。そして、課題と認識しているかどうかは不明であるが、 「人材像の明文化」は32.0%、「人材像の毎年の見直し」は52.2%の企業でし か実施されていなかった。

企業規模が大きいほど採用ルールの運用上の問題が少なく、 例年通りの採用ができている割合が高かった。

- 05年の採用状況に関しては「2,000名以上」の大企業では100%が「例年通り」という回答であった。採用数が多いため例年との差が目立たないのかもしれないが、企業規模が大きいほど「例年通り」という回答が多かった。
- また、採用ルールの運用に関しては企業規模が大きいほど「問題ない」という意見が多く、人材像の明文化、能力診断テストの導入など、各種取り組みも企業規模が大きいほど積極的であった。
- □ ただし、大企業は採用担当者が多いためであろうと思われるが、意志の統一 に課題を感じていた。

継続的な改善活動のために!

在学生·卒業生·企業人事担当者·教職員 2005 KIT総合アンケート調査結果[報告書]

■発行日 平成17年8月17日

■発行者 学校法人 金沢工業大学

■調査票設計・分析 有限会社 アイ・ポイント

■編集 金沢工業大学企画部 C S 室

無断複製厳禁